

## 4 金壽卿の朝鮮語研究と日本

### —植民地、解放、越北—

板垣 竜太

#### はじめに

金壽卿を主人公としたリ・ギュチュンの小説『人生の絶頂』<sup>サルメ ムェプリ</sup>は、日本の植民地期および米軍政下の南朝鮮に住んでいた時期の金壽卿を「植民地知識人」と呼んでいる<sup>1</sup>。「長編実話」と称された同書は、全体的には創作的色彩が強いものの、金壽卿の生前に発表されたものであり、ある程度本人に取材して書かれたと考えられる。ただ、「植民地知識人」としての金壽卿がリアリティをもって描かれているとは言いがたいし、越北後の歩みも単純化され誇張されている。

そもそも「植民地知識人」とは何なのか。異民族が主権を奪い、日増しに同化主義的な圧力が強まり、さらには戦時動員が進行していく状況において高等教育を受け、言語学者への道を歩むということはどういうことなのか。そうした植民地状況からの「解放」とは何だったのか。分断、革命と建国、戦争と目まぐるしく状況が変化していくなかで、どのように朝鮮語学を構築していったのか。

本稿は、日本の植民地下で知識人として自己形成した金壽卿の足跡を追

---

<sup>1</sup> 리규춘 [1996: 10, 18]。なお、リ・ギュチュンは、この他、金壽卿の京城帝大同期だった歴史学者・金錫亨<sup>キムソクヘン</sup>を主人公にした小説『信念と人間』[리규춘 2001] も公刊している。金錫亨は1996年に亡くなっているので、死後の出版である。

うとともに、その延長線上で、1945年以降の研究者としての歩みを描き直すものである。金壽卿の業績については、崔炅鳳の先駆的な研究においてかなり網羅的な検討が加えられているが〔崔炅鳳 2009〕、1945年以前の経歴についてはまだ明らかになっていないことが多い。まず本稿の前半（1・2）では、史料や遺族の証言などにもとづいて、1945年以前の金壽卿の動向を可能なかぎり明らかにする。その上で本稿の後半（3）では、1945年以降の金壽卿の歩みを脱植民地化と分断の歴史的脈絡に置き直して読む。ただし、本稿では紙幅の関係および他稿との重複を避けるためにも、朝鮮戦争以前の研究までにとどめることとする。それ以降については、別稿〔板垣 2014〕に譲る。

## 1. 言語学者になる

### 1-1. 家庭環境

金壽卿は、1918年5月1日、東海岸に位置する江原道通川郡の中心地・<sup>カンウオンド トンチヨングン</sup>通川<sup>トンチヨンミョソリ</sup>面西里（現在は休戦ラインの北）において、父・<sup>キムソンドック</sup>金瑄得（1896-1950）と母・<sup>イソオク</sup>李素玉（1893-1961）の間に生まれた【図1】。兄に<sup>キムボッキョン</sup>金福卿（1913-1974）、妹に<sup>キムジョニア</sup>金貞娥（1926-）がいる。金氏は<sup>キョングジュ</sup>慶州金氏の將軍公派だが、士族（兩班）や吏族（郷吏）などの支配階層の家系ではなく常民の家だったようである。

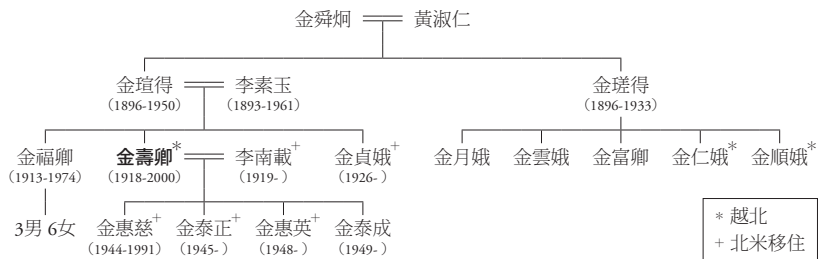


図1 金壽卿の家系図

金瑄得の経歴は、金壽卿の社会的背景を知るためにも重要なので、以下、簡潔に整理しておこう。

金瑄得には双子の弟・<sup>キムチャドック</sup>金瑳得（1896-1933）がいた。2人はいわゆる「遺腹の子」として母子家庭で育った。母の<sup>ファンスギン</sup>黄淑仁は苦しい家庭環境のなかで子どもを育て、金瑄得を12歳という若い年齢で良い家の娘である<sup>イソオク</sup>李素玉と結婚させた。金瑄得は初等学校を卒業後、江原道内にある<sup>チュンチョン</sup>春川公立農業学校に進学し、卒業（1915年3月）後はソウルの京城専修学校に進学した<sup>2</sup>。これは併合前からあった法学校を1911年に改称した法律専門学校で、「公私の業務に従事」する朝鮮人を養成する官立学校であった<sup>3</sup>。1918年3月に同校を卒業し、<sup>チョルラプット</sup>全羅北道の地方裁判所の<sup>ジョンソプ</sup>井邑支庁で判任官見習期間を経て、同年10月に同支庁において書記兼任通訳生（判任官）に任用された<sup>4</sup>。裁判所での実務経験を積んだ上で、<sup>クワンジュ</sup>光州地方法院・京城法務局での朝鮮人判事試験に合格し<sup>5</sup>、1921年9月に朝鮮総督府判事（高等官）に昇進し、全羅北道の<sup>グンサン</sup>港湾都市・群山の支庁で判事に任用された<sup>6</sup>。もともと富裕な家

2 履歴情報は『辯護士認可二關スル書類』朝鮮總督府法務局庶務係、1936年（国家記録院文書・管理番号 CJA0004097）所収の「辯護士名簿登録換認可二關スル件 金瑄得」（1936年）を参照した。

3 「京城専修學校規程」、『朝鮮總督府官報』1911年10月20日号外。

4 『朝鮮總督府官報』1918年10月25日。任用の日付は10月23日である。また、下記の文献も参照。『（大正八年一月一日現在）朝鮮總督府及所屬官署職員録』、朝鮮總督府、1919、134頁。

5 『毎日申報』1921年6月3日、6月23日。

6 朝鮮總督府判事への任命は『朝鮮總督府官報』1921年10月3日、群山での任用は『（大正十一年）朝鮮總督府及所屬官署職員録』1922年、156頁を参照。当時、朝鮮人が判事となるには、大きく（1）一般任用と（2）特別任用があった。（1）一般任用は判事検事登用試験を受けるもので、日本でも朝鮮でも通用する判事資格であった。一方、（2）特別任用は朝鮮人のみを対象とするもので、朝鮮でのみで通用した。これにも、（2-a）1910年制令第7号にもとづき、定められた学校で3学年以上学び、「文官高等試験委員の銓衡」を経て判事になる制度と、（2-b）1920年制令第11号にもとづき、5年以上・判任官以上に在職し司法事務に従事した者について、特別な試験によって判事になる制度があった〔金炳華 1979：90-97〕。金瑄得の場合は、まだ5年以上官職に就いていなかったため、（2-a）のケースと思われる。

というわけではなく、朝鮮時代以来の文人の家庭というわけでもなかったポジションから、新知識を積極的に取り入れ、植民地下の極度に制限された「立身出世」のコースに乗ったレアケースといえる。

金瑄得はその後、1923年10月に朝鮮北部の国境の都市・新義州<sup>シニジウ</sup>において地方法院の判事となった。しかし1925年6月には判事を辞任することになった。遺族によれば、独立運動家に有罪判決を下さなければならぬ立場がつかなくて辞職したという。実際、1919年の3・1運動以降、独立を求める様々な秘密結社が朝鮮半島の内外で盛んに武装闘争を展開していた。調べた限りにおいて、金瑄得は、そのうち天摩山隊<sup>チョンマサン</sup>と呼ばれる部隊を率いていた崔時興<sup>チュシキウ</sup>、朝鮮半島西北部を中心に活動していた碧昌義勇団<sup>ビョクチャン</sup>の楊承雨<sup>ヤンスンウ</sup>に対する死刑判決に判事として関わっていた<sup>7</sup>。裁判長が日本人だったとはいえ、独立運動への参与者に死刑を宣告する判決に陪席判事の1人として責任のある地位にあったことが苦しかったのであろう。

判事を退職した金瑄得は、1925年8月に群山で弁護士を開業した。ここで詳細は控えるが、群山では様々な活動に携わった。労働団体を網羅した群山労働聯盟の顧問、「純全たる朝鮮文藝を研究」するための群山文友会の結成と会長就任、群山幼児院の設立と院長就任などである<sup>8</sup>。起訴された金堤<sup>キムジエ</sup>の青年会会員の弁護を無料で引き受けたこともあったし、裡里<sup>イリ</sup>における在満同胞擁護会事件の弁護なども引き受けた<sup>9</sup>。ある意味、新義州時代の贖罪活動をおこなっていたようにも思われる。そうした活動の結果、日本人が多く住む群山において、金瑄得は朝鮮人としては指折りの有力者

<sup>7</sup> 崔時興については『東亞日報』1924年7月21、30日、楊承雨については『東亞日報』1924年8月10日を参照。

<sup>8</sup> 群山労働聯盟については『東亞日報』1926年1月14日、文友会については『東亞日報』1926年1月19日・3月3日、幼児院については『東亞日報』1927年3月3日、1928年3月24日を参照。

<sup>9</sup> 金堤郡孔徳青年会の弁護については『東亞日報』1927年6月14日、裡里事件の弁護については『東亞日報』1928年2月12日。

となっていた<sup>10</sup>。

しかしながら金瑄得は、ちょうど金壽卿が京城帝大に進学した年である1934年に群山を去り、通川に帰郷した。故郷の家事一切を任せていた弟の金瑄得が同年亡くなったためである<sup>11</sup>。金瑄得は弟がおこなっていた酒類醸造場「東鮮」の経営を引き継ぎ、1934年10月に合名会社とした。事業規模を拡大し、漁業にも事業展開した<sup>12</sup>。そのため1936年頃で年収が約5千円と、かなり裕福な家庭となっていた<sup>13</sup>。また、弟が力を注いでいた無産児童のための学校・金州学院の維持や院長としての運営もおこなった<sup>14</sup>。その他、通川商工協会の会長、通川漁業組合の組合長など、ここでも地域の名士として活動した<sup>15</sup>。

以上、1945年以前の金壽卿の家庭環境について、父・金瑄得の経歴を中心に整理した。いくつか金壽卿のバックグラウンドとして重要な点を挙げておけば、まず父が学校教育を通じて自らの地位を獲得したこと、そのため教育への投資に対して極めて熱心であったと考えられること、それも自分や家族のみならず無産児童も含めた教育への思いを有していたこと、それを支える経済的な基盤を築いていたこと、通訳生という言葉と言語の間に身を置く仕事を経験していたこと、朝鮮文芸に対する理解もあったこと

---

<sup>10</sup>たとえば『開港三十周年記念 群山』[釜山日報群山支社 1928] という冊子の末尾には、46名の著名人物が紹介されているが、金瑄得はそこに並ぶ唯一の朝鮮人であった。

<sup>11</sup>前掲・弁護士認可書類および遺族証言による。

<sup>12</sup>『朝鮮銀行會社組合要録』には、少なくとも1935年版から1942年版まで東鮮の記録が残っている。

<sup>13</sup>年収情報は前掲・弁護士認可書類による。

<sup>14</sup>金州学院(大同学院)については、『東亞日報』1932年2月25日, 1933年7月16, 1935年4月10日, 4月24日に詳しい。

<sup>15</sup>通川商工協会については朝鮮商工会議所[1939年: 113-114]、通川漁業組合については『朝鮮總督府官報』1940年7月17日, 1944年3月30日。後者では創氏改名後の山川清光という名で記載されている。なお、『東亞日報』1936年5月10日の記事「法曹界の明星」に、「通川の代表的人物」として写真入りで紹介されている。

が挙げられよう。また、父が判事の時代に民族独立運動に接していたことや、弁護士として地域の青年運動を支援していたことも、幼年時代の金壽卿の重要な背景として銘記しておくべきであろう。

## 1-2. 京城帝国大学

金壽卿は幼い頃に故郷の通川を離れ、母とともに父のもとへと移り住んだ。普通学校（朝鮮人向けの小学校）には新義州で入学した。その後、群山公立普通学校への転学（1925年夏）、群山公立中学校（1930年入学）を経て、1934年に京城帝国大学予科に入学することになる。この頃、普通学校は一般に6年制、中等学校は5年制であった。したがって満6歳で普通学校に入学し、修業年限どおり進んだ場合、大学予科入学時には満17歳となるはずである。ところが、1918年5月生まれの金壽卿が予科に入学したのは1934年4月、まだ満15歳のことであり、通常より2年も早い。これは、普通学校と中学校で1年ずつ、いわゆる「飛び級」をしたためであった。普通学校の方は、詳しいことが不明である。遺族は1年早く入学したと伝え聞いているが、「普通学校規程」では4月1日時点で満6歳に達していない場合は、その年度は入学できないことになっている。規程にもかかわらず1年早く1924年に入学して6年間修了したか、あるいは1925年に入学して「学業優秀且身体の發育十分」とみなされ5年間で普通学校を終えたか、いずれかである。また、「大学令」では中学校4年を修了した者は修業年限3年の大学予科に入学できると定めており、これを俗に「四修」と呼んだ。いずれにせよ金壽卿の成績が極めて優秀だったということであろう。

群山中学校について付言しておこう。当時、「国語を常用する者」すなわち主として日本人向けには「中学校」（朝鮮語が随意科目）、「国語を常用せざる者」すなわち主として朝鮮人向けには「高等普通学校」（朝鮮語が必修科目）と、異なる学校体系があった。群山中学は、もともと日本人篤志家の寄付によって1923年に建てられた日本人向けの学校であり、全羅北道

で唯一の中学校であった。一方、総督府による中等・高等教育の抑制政策の結果として、群山には朝鮮人向けの中等普通教育施設が無く、高等普通学校に進学しようとすれば40km程離れた全州<sup>チヨンジュ</sup>まで行かなければならなかった。そこで、1928年に群山中学校が全羅北道に移管されるのに伴い、朝鮮人も3分の1程度入学させることを求める陳情運動が起こったりもしたが<sup>16</sup>、この運動は実らず、1928・29年は毎年3-4人の朝鮮人が進学したに過ぎなかったという<sup>17</sup>。金壽卿が入学した1930年度には学級が増設されたものの<sup>18</sup>、1931年度で全校生徒中の日本人314名、朝鮮人32名（9.2%）、1933年度で日本人383名、朝鮮人47名（10.9%）という割合だった<sup>19</sup>。遺族所有の写真のなかには、卒業前に群山中の朝鮮人生徒だけが学年をこえて一緒に記念撮影をしたものがあるが【図2】、そこからは朝鮮人が数の上でもマイノリティであった学校に通う子どもらの民族的な連帯意識を読み取ることができる。そうした学校に金壽卿は飛び込んだのであった。

群山中学校を修了した金壽卿は、1934年4月、京城帝国大学予科に入学した。城大（京城帝大の略）は、ちょうどこの年度の入学者から予科の修業年限を2年から3年に延長していた。また、それまで文科入学者を文科A（法学系）・文科B（文学系）と分けていたのを、第一外国語を英語とする文科甲類、ドイツ語とする文科乙類に分けるよう変更した。他の帝大や高等学校に合わせた改革であった〔京城帝国大学同窓会1974：23-28〕。金壽卿は文科甲組に予科・第11回生として入学した。同期生のなかには、後に越北する金錫亨<sup>ソッキョン</sup>（史学）・申龜鉉<sup>シングヒョン</sup>（文学）・丁海珮<sup>チョンヘジン</sup>（哲学）・李明善<sup>イミョンソン</sup>（文学）・金得中<sup>キムドクチュン</sup>（史学）らがいた【図3】<sup>20</sup>。

<sup>16</sup>『中外日報』1928年2月28日、『東亞日報』1928年3月1日。

<sup>17</sup>『東亞日報』1930年2月10日。

<sup>18</sup>『毎日申報』1930年3月5日。

<sup>19</sup>『全羅北道要覧』（全羅北道）の1931年8月版・10頁、1933年8月版・68頁。

<sup>20</sup>『朝鮮總督府官報』1934年3月30日。



図2 群山中学校での送別記念写真（1933年）

（備考）この“송별기념”（送別記念）（1933年3月4日付）と題された写真には、3年生の金壽卿（最後列、右から2番目）を含む17名の男子生徒が写っている。裏面に記された名前は全て朝鮮人で、学年も1～5年にまたがっている。なお、1934年3月4日付の写真にも20名の男子生徒が写っており、裏面情報も同様である。



図3 京城帝大予科時代（1934年）

（備考）1934年12月8日付で、“清凉里 뒷산에서”（清凉里の裏山で）とメモされている。左から2番目が金壽卿。



1934年度予科入学生のカリキュラムは表1のとおりである。一般教養科目が並んでいるが、なかでも語学関連の科目が目立っている。金壽卿は予科時代までに英語・ドイツ語・フランス語はマスターしていた〔小林1951：347〕。語学はこの後の金壽卿にとって極めて重要な武器となるので、これについては次章で述べる。

表1 京城帝国大学予科のカリキュラム（1934年）

	第1学年	第2学年	第3学年
修身	1	1	1
国語及漢文	5	5	6
第一外国語	10	9	9
第二外国語	4	4	4
歴史	3	5	4
地理	2	—	—
哲学概説	—	—	3
心理及論理	—	2	2
法制及経済	—	2	2
数学	3	—	—
自然科学	2	3	—
体操	3	3	3
計	33	34	34

（備考）数字は毎週の教授時数。

（出典）『京城帝國大學一覽（昭和九年）』京城帝國大學，1934年，101頁。

1937年4月、金壽卿は京城帝大法文学部哲学科に進学した。この進学経緯については、京城帝大で言語学を教えていた小林英夫が、戦後、次のように回想している〔小林1951：346-347〕。

金君は三年の終りごろ学部の研究室にぼくを訪ねてきて、言語学を専攻したい意志を明らかにした。あいにく城大の法文学部には言語学講座の設けがなかったので、専門的な講義をきくすべがなかった。それでよんどころなく、他に専攻を決めなければならなかった。

ぼくは哲学科をすすめた。教授陣の充実ということもあったが、それよりもこれからの言語研究は哲学的頭脳を必要とするように考えたからだった。

この引用文の含意を理解するためには、当時の法文学部の学科等の構成について確認しておく必要がある。表2は、金壽卿が入学した年度における法文学部の学科・専攻・講座担任をまとめたものである。文学科には時枝誠記の「国語学」すなわち日本語学のほか、小倉進平の朝鮮語学の講座が設置されていた。にもかかわらず金壽卿が小林研究室の戸を叩いたのは、個別言語の研究ではなく、より一般的な言語学に関心を示していたということであろう。小林英夫はソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913年) の『一般言語学 (*Cours de linguistique générale*)』の翻訳などの活躍で既に著名人物だったが、東京帝大では選科生で学士号をもっていなかったためか、助教授のまま講座の担任が無かった。ここで小林が「言語学講座」が無いといっているのも、ヨーロッパで盛んにおこなわれていた比較言語学や一般言語学などを体系的に教える講座が無かったということであろう。

小林のアドバイスがどれほど作用したのかは不明だが、金壽卿が進学したのは、哲学科のなかでも哲学専攻、いわゆる「純哲」(純粹哲学) のコースだった。当時、哲学専攻で教鞭をとっていたのは、法文学部長もつとめた安倍能成<sup>よししげ</sup>やその妹婿たる宮本和吉<sup>わきち</sup>らであった。いずれもカント研究で業績をあげた哲学研究者で、京城帝大では安倍が主として哲学史、宮本が最新のフッサールの現象学も含む哲学概論を講義したというが〔安倍 1966 : 557〕、言語思想に特に詳しいということではなかったと思われる。そのた

表2 京城帝国大学法文学部の学科・専攻・講座（1937年度）

学科	専攻	講座担任	
法学科	(専攻別無し)	(略)	
哲学科	哲学専攻	安倍 能成	宮本 和吉
	倫理学専攻	白井 成允	秋葉 隆
	心理学専攻	黒田 亮	
	宗教学専攻	赤松 智城	
	美学、美術史専攻	上野 直昭	田中 豊藏
	教育学専攻	松月 秀雄	田花 爲雄
	支那哲学専攻	藤塚 鄰	
史学科	国史学専攻	田保橋 潔	松本 重彦
	朝鮮史学専攻	藤田 亮策	
	東洋史学専攻	大谷 勝眞	鳥山 喜一
文学科	国語国文学専攻	高木 市之助	時枝 誠記
	朝鮮語朝鮮文学専攻	高橋 亨	小倉 進平
	支那語支那文学専攻	辛島 驍	
	英語英文学専攻	佐藤 清	

(出典)『京城帝国大学一覽 昭和十二年』(1937年)より作成。

(備考) 講座名は専攻名に対応しているが、このうち秋葉隆は社会学講座である。また、西洋史講座を担当していた史学科の金子光介は、対応する専攻がないために外してある。講座担任は通常教授だが、辛島驍のみ助教授である。

め金壽卿は、哲学科で基礎的な思想史を学びながらも、「ひまあるごとにぼく [=小林英夫] の研究室を訪れて、言語学の知識の吸収につとめ」という [小林 1951 : 347]。その内容については次節で述べる。

金壽卿の学籍簿がソウル大学校に残っていないため、何をどう学んだのかについて正確には分からない。規程によれば、卒業までに、哲学科の共通科目（哲学、倫理学、心理学、美学・美術史、教育学、中国哲学、社会学、史学概論・文学概論）、専攻に属する科目（哲学、倫理学認識論、哲学特殊講義及演習、ギリシア語・ラテン語、その他の哲学科・史学科・文学科に関する科目）、外国語

(英・独・仏)を学んだ上で、卒業論文を提出することになっていた<sup>21</sup>。卒業論文はヘーゲル哲学に関するものだったという〔小林1951：347〕。「純哲」は入学当時、教員側が教授2名(安倍、宮本)、助教授1名(田邊重三)、助手1名(高亨坤)の計4名に対し、学生は1937年度生4名(金壽卿、丁海珮、金洪吉、近藤時雄)、1938年度生1名(柘中健毅)の計5名しかおらず、かなり濃密な関係だったようである【図4】<sup>22</sup>。後に宮本は、「純哲」の合計30数名の卒業生の9割が朝鮮人で、概して頭がよかったと回想している〔宮本1951：39】<sup>23</sup>。



図4 京城帝大法文学部哲学科時代(1938)

(備考)裏面に「1938.3.7 昭和十二年度哲學専攻生卒業 送別紀念」と記されている。後列右側より金壽卿(1回生)、安倍能成(教授)、高亨坤(助手)、田邊重三(助教授)、宮本和吉(教授)、丁海珮(1回生)、朴義鉉(1936年卒業)、前列右側より孫明鉉(大学院生、早稲田大卒、ギリシア哲学研究)、李本寧(1938年選科修了)、柘中健毅(1938年卒業)、有賀文夫(大学院生、京城帝大卒、超越論研究)、金洪吉(1回生)。

<sup>21</sup>『京城帝國大学一覽 昭和十二年』1937年、72-75頁、83-85頁。

<sup>22</sup>前掲『京城帝國大学一覽』より。

<sup>23</sup>ただし宮本和吉は、朝鮮人学生について、成績はよいが、卒業研究では創造性が無かったなどと低く評価している。

もちろん法文学部時代に朝鮮語学も学んだことは間違いない。朝鮮語学者の小倉進平は、1933年以降、東京帝国大学言語学科教授を兼任して本拠地を東京に移し、京城帝大には秋に集中講義で来ており〔東京大学 1986 : 692〕、それは聴講していただろう。また、予科時代のこととして、金壽卿ら十数名が朝鮮語学会の事務室に行き、新たなハングル綴字法を李克魯から習ったという取材記事がある<sup>24</sup>。朝鮮プロレタリア芸術家同盟 (KAPF) を代表する作家だった林和や同期生の申龜鉉に勧められ、フランスのクーラン (Maurice Courant, 1865-1935) が朝鮮の文献についてまとめた大著『朝鮮書誌 (Bibliographie coréenne)』(1894-96) の翻訳に着手したのは1939年秋のことだった〔金壽卿 1946 : 190〕。

こうして予科・本科あわせて6年間に渡る大学生活を終えた金壽卿は、1940年3月31日、学士試験に合格し、文学士の学位が授与された<sup>25</sup>。

### 1-3. 東京帝国大学大学院進学から解放まで

京城帝大を卒業した金壽卿は、1940年4月30日付で東京帝国大学文学部大学院に入学し、書類上は1944年3月15日に退学するまで約4年間在学した。指導教員は言語学講座を担当していた小倉進平であり、研究課題は「朝鮮語の比較言語学的研究」であった。単身東京に渡り、最初は杉並区高円寺で下宿生活をしていたようである<sup>26</sup>。当時の大学院には博士学位しかなく、

---

<sup>24</sup> 李忠雨 [1980 : 228-229]。情報リソースは不明であるが、李鍾原、車洛勳、金錫亨、金洪吉、金壽卿、丁海珮、申龜鉉、李明善らが参加したという。朝鮮語学会が『한글맞춤법 통일안』を出したのは1933年のことである。なお、리규춘 [1996 : 20-21] でも、京城帝大時代に李克魯を訪ねて行ったと記されている。

<sup>25</sup> 『朝鮮總督府官報』1940年4月9日。遺族所蔵の法文学部卒業式の写真 (1940年3月25日) では、背の高い金壽卿が学帽をかぶらず、学生の最前列の真ん中に立っているの、たいへんよく目立っている。

<sup>26</sup> 東京大学文学部所蔵の学籍簿による。住所は「杉並区高円寺五丁目八十五ノ三 荻原方」であった。高円寺から大学のある本郷までは遠いが、なぜこの家だったかは不明である。

学部研究科で2年以上研究に従事し、論文を提出して合格した者に授与されることになっていた<sup>27</sup>。大学院生は各学部に分属し、指導教員の指導を受けて研究に従事することになっていた。在学期間は2年間だが、満期となっても1年ずつ延期は可能で、最長5年間まで在学することができた。特段のカリキュラムなどは無く、ただ毎年度末に「其の攻究の状況及成績を記載したる報告書」を指導教員に提出することが求められている程度であった<sup>28</sup>。金壽卿がこの報告書を出していた形跡は確認できるが、1943年2月10日付でまとめて3年分を出し、退学後の1944年4月26日に最後の提出をしており<sup>29</sup>、あくまでも形式的なものだったといえる。そうしたこともあり、この時期の金壽卿の足跡をたどるのは容易ではない。以下、基本的な事実関係のみ整理しておきたい。

金壽卿の大学院進学当初、東大言語学研究室は、上田萬年門下の朝鮮語学者である小倉進平を講座担任教授とし、アイヌ語学の金田一京助（助教授）、ギリシア・ラテン語の神田盾夫（助教授）、モンゴル語学等を講じていた服部四郎（講師）がいた。1943年春には小倉・金田一の両教授が退職し、代わって服部四郎が助教授に昇進するなど、大きな変動があった〔東京大学 1986：692-695〕。金壽卿の指導教員もこの時に服部四郎に代わっており、その交替の関係で3年分の報告書をまとめて出すことになったと思われる。

1940年度の東京帝大の大学院生総数は406名、そのうち朝鮮からの留学生は10名であった<sup>30</sup>。なかでも金壽卿に近い大学院生は、まず京城帝大「純哲」同期の丁海珮が「独逸観念論の研究」という研究課題で進学していた

---

<sup>27</sup>「學位令」（1920年勅令第200号）および「東京帝國大學學位規則」（1921年）による（『東京帝國大學一覽 昭和十五年度』101-109頁）。

<sup>28</sup>「學部通則」（前掲『東京帝國大學一覽 昭和十五年度』150-153頁）。

<sup>29</sup>東京大学文学部所蔵の大学院研究生研究報告提出簿による。残念ながら報告書自体は保管されていない。

<sup>30</sup>前掲『東京帝國大學一覽 昭和十五年度』附録。

ほか、梨花女子専門学校で教えていた朝鮮語学者の李熙昇（京城帝大卒）が「安息年」として1940年度の1年間「朝鮮語の音韻的研究」という研究課題で小倉進平のもとに来ていたし、「純哲」のずっと上の先輩である金桂淑もドイツ観念論研究のため大学院に来ていた<sup>31</sup>。李熙昇 [2001 : 134-136] による後の回想によれば、朝鮮人留学生は「同じ民族」という意識をもって親しく過ごし、休日には旅行などもしていたという【図5】。



図5 東京帝大図書館前で李熙昇とともに（1942）  
（備考）裏面には“En avant de la bibliothèque”とのメモがある。

大学院時代で重要な出来事は李南載との結婚である。李南載は中朝国境地帯である間島生まれで、吉林省龍井の光明女子高等学校を出て、1936年にソウルの梨花女子専門学校文科に進学し、1940年に卒業していた。金壽卿は、1942年3月、ソウルでおこなわれた京城帝大同期の李明善の結婚式に出席した際に、李南載と出会った。翌1943年3月に2人はソウルの京城府

<sup>31</sup> 前掲『東京帝國大學一覽 昭和十五年度』492-496頁。

民館で結婚式を挙げた。その後、新婚旅行を経て、2人は豊島区要町に新居を構えることになった<sup>32</sup>。この家は金壽卿の親戚である画家・<sup>キムミング</sup>金敏龜のアトリエだったが、本人が通川に帰郷することになったため、借りることになったという。

しかしながら東京での新婚生活は長く続かなかった。1943年の夏休み<sup>33</sup>に朝鮮に帰った2人は、そのまま東京には戻らず、金瑄得が用意していたソウルの恵化町（現・<sup>ヘフア</sup>恵化洞）の家に住むことになったのである。そして書類上は1944年3月15日付で「一身上ノ都合上」により退学し<sup>34</sup>、4月15日付で京城帝大法文学部朝鮮語学研究室の嘱託となった<sup>35</sup>。東京での研究を中断した理由については、1943年春に小倉進平が退官していて朝鮮語学の専門家が東京帝大からはいなくなっていたこと、既に李南載がお腹に子どもを宿していたことなども考えられる。だが、学徒出陣の問題が最も大きかったのではないかと推察される。小林英夫〔1978：567〕は、「昭和17年ころであったか、当時東大の大学院に席をおいていた金壽卿君が物情騒然となったので一時帰国し、わたしの研究室にしきりに顔を出すようになった」と回想している。「一時帰国」の時期は曖昧で、「物情騒然」の内容も不明だが、東大に席を残したままソウルに戻ってきたことはわかる。また、この頃に京城帝大法文学部で小倉進平の後任として講座担任をしていた河野一郎が、後に言語学者・菅野裕臣に伝えた情報によれば、「金壽卿氏は学徒

---

<sup>32</sup> 前掲・東大学籍簿には「豊島区要町三丁目十一ノ一」とある。

<sup>33</sup> この頃の学年暦は戦時期のためきわめて変則的になっていた。1942年度が4～9月の半年で終わったところで、学年がズレはじめた。1942年には夏期休業が廃止となり、1943年には7月11日から8月30日までのあいだの1ヶ月以内で学部毎に休業することになっていた〔東京大学 1986：441-442〕。

<sup>34</sup> 前掲・東大学籍簿。

<sup>35</sup> 金壽卿が金日成大学文学部に提出した自筆履歴書（No.13、1946年12月28日付）による。これは米国が朝鮮戦争時に北朝鮮でかき集めたいわゆる「鹵獲文書」に含まれている（『金大教員履歴書 文学部』、米国国立文書館 RG#242、2005 1/31所収）。以下「金大履歴書」とよぶ。遺族によれば、附属図書館の嘱託も兼任していたという。



動員を逃れるため京城帝大朝鮮語及朝鮮文学講座の無給助手をしていた」という<sup>36</sup>。嘱託任用の責任を有する地位にあった河野六郎の証言なので、この情報は信憑性があるといつてよいだろう。

朝鮮人学徒出陣をめぐる当時の状況を簡単に整理しておこう〔姜徳相 1997〕。朝鮮人にも兵役法を施行することが閣議決定されたのは1942年5月であったが、諸々の準備の関係上、法の施行は1943年8月、実施は1944年4月となっていた。一方、学生の戦争動員が進展し、1943年6月には「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定され、9月には法文系学生の徴兵延期の停止が決定され、10月には徴兵検査が始まった。だがこれは日本人学生を対象にした法令であり、朝鮮人学生には適用されなかった。日本政府は、朝鮮人・台湾人の学生だけが学園に残ることを避けるため、植民地学生を「志願」により現役兵として編入する法令を定めた。「内地」では、大学・高専と朝鮮奨学会が、留学生を「志願」させるためキャンペーンを繰り返した。ところが、行方をくらます学生が多く、朝鮮人学生は容易に出頭に応じず、「下宿を訪ねてみれば、どこへ行ったか幾日も帰らないというのが多かった」〔姜徳相 1997：60-61〕と、当時の東大教授は述べている。

その意味では、金壽卿も「行方不明」の大学院生の1人だったのかもしれない。実際、東京帝大内部文書では、どういうわけか1943年末には文学部の大学院には朝鮮人が1人もいないことになっている<sup>37</sup>。詳細に不明な点はあるものの、結果的に金壽卿は学徒出陣に駆り出されることなく、ソウルで研究を継続することができた。

京城帝大嘱託の時期の研究内容について唯一判明しているのは、創氏改名後の名前である「山川哲」<sup>38</sup>の名義で、1945年3月に『「老乞大」諸板の再

<sup>36</sup> 菅野裕臣の自叙伝「菅野裕臣の Autobiografía」の「II」大学—大学院」による。

<sup>37</sup> 「昭和十八年十二月三十一日現在本学学生生徒在籍者数調」〔東京大学史史料室 1998：430-431〕

<sup>38</sup> 金壽卿の父・金瑄得は1940年8月に、既に「山川清光」と創氏改名していた（『朝鮮總督府

吟味』を謄写版で印刷したことである〔京城帝国大学法文学部 1945〕。これについては次章で検討するが、この時期の金壽卿は、京城帝大附属図書館に移管された奎章閣（朝鮮王朝の王室図書館）の朝鮮語関連史料を、腰を落着けて閲覧するような研究をしていたことは確かである<sup>39</sup>。と同時に、学部時代のように、小林英夫の研究室に通いながらのマンツーマンの講読も続けていた。16世紀ポルトガルの叙事詩『ウズ・ルジアダス (*Os Lusíadas*)』を読んでいるうちに、日本が敗戦を迎えた〔小林 1951 : 348〕。日本が泥沼の侵略戦争を繰り広げるなか、金壽卿は朝鮮語史を深く掘り下げながら、世界の言語と言語学を広く学んでいったのであった。

## 2. 植民地下の言語学研究

以上、1945年8月以前の金壽卿の足跡を、判明した限りで辿ってきた。本章では、そのうち重要と思われるポイントを掘り下げる。解放後の金壽卿の言語学は、「日本の朝鮮語学」や「国語学」といった枠組に収まりきれない性格を有している。とって、ただ輸入理論型の学問でもなく、朝鮮語史の文献学的な蓄積も踏まえている。本章では、そうした金壽卿言語学の知的基盤の一端について明らかにしておきたい。ここでは、まず金壽卿の語学能力について確認した後、社会主義との関係について検討した上で、哲学や一般言語学・構造言語学への志向性と、史的言語学にもとづく朝鮮語学への志向性について見ておきたい。

---

官報』1940年10月3日)。戸主の金瑄得の創氏により、この時に金壽卿の氏も山川となっていたはずである。だが、東京帝大文学部に新氏名を届け出たのは1943年3月1日のことであり(学籍簿による)、少なくともそれまでは金壽卿で通っていた模様である。「山川」は群山と通川からとったもので、「哲」は哲学を専攻していたことからつけたという〔小林 1951 : 345-346〕。ただし小林は「通川」を「端川」と間違っていて記憶している。

<sup>39</sup> この頃、ソウルで河野六郎とともに雑誌を出していたとの情報もある(前掲「菅野裕臣の Autobiografía」)。

## 2-1. 金壽卿の知的背景

金壽卿を直接知る人は、口を揃えるようにその語学力について語っている。まず群山中学校に入学できた時点で、在朝日本人の生徒並みに日本語ができたと思われる。漢文教育を書堂や家庭などで受けた形跡はないが、普通学校・中学校・予科の科目には漢文があり、そこで基礎は習得したと考えられる。また、中学校からは英語を学んでいた<sup>40</sup>。大学予科修了までには、先述のとおり英語・ドイツ語・フランス語を身につけていた。英語については、予科の梅原義一・兒玉才三の両教授の指導のもと、丁海珮らとともに「英語研究会」で学んでいた【図6】。研究会では18世紀イギリス



図6 英語研究会（1937）

（備考）「英語研究会 送別記念 於金閣園 1937.2.20」と記されている。記された名前から写っている人物を特定すれば、前列右側より梅原義一（予科英語教授）、兒玉才三（予科英語教授）、後列右側より桶下田國威（文科3年甲組）、丁海珮（文科3年甲組）、金壽卿（文科3年甲組）、金丸光富（文科2年甲組）、高谷久則（文科1年甲組）である。

<sup>40</sup> 旧制中学校では英語・ドイツ語・フランス語・中国語が外国語科目として設定されていたが（中学校規程）、金壽卿の群山中学校の通知表（1933年度）では英語科目だけが記されていた。

のロマン派の詩などを耽読していた〔金壽卿 1937〕。ドイツ語は予科で必須の第二外国語であるが、哲学科時代にはドイツ語による哲学書の講読を相当こなしたはずである。フランス語は予科で科目が設置されておらず、本科進学以前にどのようにマスターしたかは不明である。ただし、遺族によれば、金壽卿の父（金瑄得）は「朝鮮人は勉強しなければならない」との考えから、外国語を学びたいという息子に対し外国語の個人指導の費用を提供したことがあったということなので、そうした特別の教育を受けていた可能性もある。

他の言語についても述べよう。哲学科ではギリシア語・ラテン語がカリキュラムに含まれていた。ロシア語は法文学部講師チルキン（S. V. Chirkin, 1879-1943）から習った<sup>41</sup>。チルキンは帝政ロシアの元外交官で、ロシア革命以降、かつての赴任地だったソウルに移り住んだ、いわゆる白系ロシア人だった<sup>42</sup>。授業を年度末まで受け続ける学生はごく僅かで、金壽卿はその1人だったという〔李忠雨 1980：218〕。イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、デンマーク語は小林英夫から手ほどきを受けた。イタリア語はダンテの『神曲』を、スペイン語は現代作家の作品を、ポルトガル語は既述のとおり『ウズ・ルジアダス』を講読した。難しいテキストの読解も「ケロリとした顔でやってのけた」金壽卿に対し、「ぼくは内心、彼の底知れぬ語学力に舌を巻くのだった」と小林〔1951：348〕は回想している。解放直後にはサンスクリットの講義をしていたというから<sup>43</sup>、その程度に学習

---

<sup>41</sup> “Russian” と書かれた1938年2月15日付の写真を遺族が保管している。チルキンを4人の学生が囲んで教室で撮ったものだが、金壽卿は写っておらず、撮影側にまわったものと思われる。参考までに学生は裴濤（中文）、李碩崑（英文）、丁海珮（哲学）、龐溶九（英文）である。同期の丁海珮以外の3名は、予科の1年上の先輩である。

<sup>42</sup> チルキンの回顧録の原稿が最近になってロシアで出版されているが、外交官時代のことがほとんどで、1920年代以降のことはほとんど書かれていない〔Chirkin 2006〕。

<sup>43</sup> 後にソウル大言語学科教授となる金芳漢が習っていたという（前掲「菅野裕臣の Autobiografía」）。

していたのであろう。モンゴル語も習得していたようだが<sup>44</sup>、これは東京帝大の服部四郎の関係もあるかもしれないし、後述する「老乞大」研究とも関係あるかもしれない。

かくて金壽卿は1945年(27歳)までに、インド・ヨーロッパ諸語(印欧諸語)の古典語(ギリシア語、ラテン語、サンスクリット)と現代語(英、独、仏、露、伊、西、葡、丁)、そして東アジアの古典語たる漢文と諸言語(朝、日、中、蒙)を習得していたことになる(他にもあるかもしれない)。この類い希な語学能力が、金壽卿言語学の幅広さを担保していたといえよう。

次に、金壽卿の知的基盤の国際性を考えるとき、社会主義との関係は検討に値する。ただ、あらかじめ述べておけば、金壽卿が戦前に社会主義者だったという直接的な証拠はなく、間接的な状況証拠しかない。

作家リ・ギチュンは、京城帝大時代に金壽卿が金錫亨<sup>パクシヒョン</sup>、朴時亨(選科生として1937年に法文学部史学科に入学)、申龜鉉らとともに「読書会」を秘密裡に結成し、マルクス・レーニン主義哲学と経済学の書物を読破したと描いている[리규준 1996: 19]。十分あり得る話だが、小説のみを根拠にするわけにもいくまい。ただし、これを多少裏付けるのが、金壽卿の同期生であった金得中が1947年に金日成綜合大学に提出した履歴書に付した「自叙伝」(経歴説明書)である。金得中は、そのなかで「[京城帝大予科]2学年の時からは社会科学に留意するようになり、その方面の読書を始め、意気相合した学友とともに読書会をもち、あるいは名士を訪ねてかれらの経歴や抱負を聞いたりした」と述べている<sup>45</sup>。当時の「自叙伝」は、過去の思想的・運動的経歴を強調して書くため傍証を要するが、読書会自体はあったと見

<sup>44</sup> 前掲「菅野裕臣の Autobiografía」。

<sup>45</sup> 김득중, “자서전”, 1947年7月28日付, 『一九四七年度 金日成大學發令件』, 北朝鮮人委教育局, NARA 文書 RG #242, 2006 12/32.1. なお、金壽卿、朴時亨、金錫亨、申龜鉉らについては履歴書に自叙伝が付されていない。もともとあったのに欠落したのか、当初より履歴書のみであったのかは不明である。

てよかろう。

この頃の一般的な状況をいえば、安倍能成 [1966 : 555] は、「その国の政治に不平」をもつ朝鮮人学生には「共産主義的傾向に走る者が多」かったと回顧しており、その例として安倍の下で助手もしていた「純哲」の学生の名をあげている<sup>46</sup>。また、ジャーナリストの李忠雨 [1980 : 218] は、法文学部時代のこととして、「図書館に備置されたソ連の新聞『イズベスチヤ』（知識という意味）や『プラウダ』（真理という意味）誌は、金壽卿（哲学科12期生）の独り占めも同然だった」と記している。当時、京城帝大附属図書館でソ連の新聞を定期購読していて、学生も容易に閲覧できる状態だったのどうかは確認できていないが、社会主義とのつながりを考える上で興味深いエピソードである。さらに、東京帝大時代に短期間指導教員をつとめた服部四郎は、1948年頃、「最近のうわさ」として「あの金君が終戦前すでに共産黨員」だったと語っていたという [小林 1951 : 348]。越北した後に聞いた「うわさ」であり、既に党組織が壊滅していた時期に「黨員」であったというのは疑問だが、何らかの非公然活動はしていた可能性が皆無ではない。

人的なつながりに関していえば、まず金壽卿の母・李素玉の弟（すなわち金壽卿の外叔父）で、後に越北する李種植<sup>イジョンシク</sup>が京城帝大で経済学を専攻した（法学科1930年度卒業）。マルクス主義者だったといい、1920年代末には京城帝大内の反帝同盟や文友会、経済研究会にも参加し、1930年には光州学生事件や東京留学生事件に関与した容疑で検挙されたこともあった<sup>47</sup>。金壽卿と同じ頃に東京帝大の大学院に進学していた「純哲」の先輩、金桂淑は京城帝大時代に経済研究会に参加し、プレハーノフやブハーリンの唯物

<sup>46</sup> 安倍が特に挙げている名前は朴致祐<sup>パクチウ</sup>（1933年卒業）、申南澈<sup>シナムチョク</sup>（1931年卒業）である。

<sup>47</sup> 李種植，“自叙傳”，前掲『一九四七年度 金日成大學發令件』および李忠雨 [1980 : 180] による。

論などを読んでいた [李忠雨 1980 : 124]。京城帝大の同期生のうち何人かは、卒業後に何らかの活動をしていた形跡が見られる。申龜鉉は、京城帝大卒業後に中央<sup>チュンアン</sup>中学校で教員をしていたが、1941年9月、朝鮮共産党再建運動事件の容疑で逮捕されている<sup>48</sup>。金錫亨と朴時亨は大卒業後それぞれ養正<sup>ヤンジョン</sup>学校(ソウル)と傲新<sup>キョンスン</sup>学校(ソウル)の教員をしていたが、1945年3月に咸鏡南<sup>ハムギョナム</sup>道<sup>ド</sup>の高原<sup>コウォン</sup>警察署に検挙され、解放の日まで咸興<sup>ハムフン</sup>刑務所で過ごした<sup>49</sup>。金錫亨の遺族は、彼がハングル研究関連の事件に連累することになったと語っているが、詳細は定かでない [金日洙 2005 : 40]<sup>50</sup>。丁海瓊はそのように検挙された形跡が見られないものの、東京帝大にいた頃に国際共産主義運動の一員として活動していたと、その遺族は語っている [鄭根植 2012 : 11]。

金壽卿は、解放直後にソウルで出した翻訳書のあとがきで、「長いあいだ筐の底に埋もれていた手稿が〔…〕日の目をみたのは、ひとえに朝鮮の解放のために闘ってきた革命闘士の余沢にほかならない」と独立運動家に謝辞を述べている [金壽卿 1946 : 191]。これは解放後に突然芽生えた思いではなかったように思われる。とはいえ、金壽卿はふだん寡黙な人で必要以外のことは語らなかった。小林英夫 [1951 : 349] も「かれは秘密の守れる男だった」と記している。彼が社会主義や朝鮮民族に対して思いを抱いていたとしても、容易には周囲に打ち明けていなかったであろう。だが、その額の奥には計り知れない思いが、グローバルな広がりをもって秘められ

<sup>48</sup> 前掲『金大教員履歴書 文学部』所収の申龜鉉履歴書 (No.1、日付記載無し)。

<sup>49</sup> 前掲『金大教員履歴書 文学部』所収の朴時亨履歴書 (No.23、日付記載無し)、金錫亨履歴書 (No.24、日付記載無し)。

<sup>50</sup> 리근奎 [2001] では、金錫亨がソウルで秘密裡に組織された武装蜂起準備結社に関わっていたと叙述している。これに関連して、進明高等女学校教員だった京城帝大同期の金得中も、同じく1945年3月に逮捕され、未決囚として解放の日まで咸興刑務所に収監された。金得中の前掲「自叙伝」によれば、「同志とともに中等学校以上の学生と教員の反帝反戦組織を画策」していたと述べている。もし、これらが同じ事件だったとすれば、城大同期が何らかの反帝国主義・反戦の動きを模索していたのかもしれない。

ていたと想像してみることは可能であろう。

## 2-2. 構造言語学と史的言語学

以上が1945年以前の金壽卿の知的バックグラウンドだが、次に彼の言語学の形成について考察しておきたい。ヨーロッパの言語学は、ギリシア・ラテンの古典研究、そしてサンスクリットの「発見」を契機とした印欧諸語の歴史的な比較文法研究と展開してきたため、19世紀までは主として「文献学」(philology)と呼ばれた。それ以来、具体的な文献の蓄積にもとづく史的言語学は言語学の1つの核であるが、20世紀には、そもそも言語とは何かを探求したソシュールの一般言語学、ソシュール以降にジュネーヴやプラハ、コペンハーゲン、米国等で展開した、いわゆる構造言語学、ソ連を中心に展開したマルクス主義言語学など、新たな潮流が次々に形成された<sup>51</sup>。金壽卿言語学の初期形成過程においては、一般言語学・構造言語学さらには言語哲学など、より普遍的な言語問題への志向性と、朝鮮語に関する個別具体的な史的言語学への志向性とが同時に存在している。その点をここで確認しておきたい。

ソシュールがジュネーヴ大学でおこなった講義を弟子がまとめた『一般言語学講義』(1916年)は、1928年に『言語学原論』とのタイトルで岡書院から初めて日本語訳が出されたが、その翻訳者が小林英夫であった。小林は京城帝大時代に、同書を改訳し縦組から横組にした新版を岩波書店から出した(1940年)。その「訳者の序」で「旧訳文を横書に移写する仕事を手伝はれた独古信子、某未亡人及び金壽卿の三氏の労」に謝辞を述べている [小林1940: 9]<sup>52</sup>。既にフランス語が堪能だった金壽卿は、ただ写し書きす

---

<sup>51</sup> さまざまな言語学史の著述があるが、本稿との関係でいえば、イヴィッチ [1974] が、ソ連等のスラヴ語圏の動向をも含めた潮流を幅広く要領よく整理しており、有益である。

<sup>52</sup> この序文は1939年10月にソウルで書かれている。



るだけの役割以上のことを果たしたに違いないが、いずれにしてもソシユールを精読していたことは確かである。解放後に公表した論文でも、ソシユールやその弟子バイイ (C. Bally) の言語論を原典から引用しており [金壽卿 1949b : 38]、ジュネーヴ学派は学んでいたと考えられる。また、小林は当時ヨーロッパの言語学論文を盛んに翻訳紹介しており、そのなかにはジュネーヴのソシユールやバイイ、セシユエ (A. Sechehaye) のみならず、プラハ学派のトゥルベツコイ (N. S. Trubetzkoy)、コペンハーゲン学派のイエルクスレウ (L. Hjelmslev) とも含まれていた [小林 1977]。

そうした最新の構造言語学の理論に金壽卿が幅広く接していたであろうことは、小林英夫が1945年に刊行した『言語研究・現代の問題』 [小林 1945] からうかがい知ることができる。同書は言語研究における「構造主義」を教育するために体系的に編まれた翻訳論文集で、仏・独・伊の諸言語で書かれた16本の論文の日本語訳が収録されている【表3】。同書は、記号の恣意性をめぐるバイイやヴァルトブルクの論争、共時態／通時態をめぐるバンヴェニストやレルヒらの論争など、当時日本ではまだどこでも紹介されていなかったヨーロッパの構造言語学をめぐる最新の議論を含むものであった。この本の「はしがき」(1943年晩夏の日付) で、小林が唯一謝辞を記したのが金壽卿であった。すなわち彼は、「原稿浄書の労についてもあるが、それよりもこれだけの論文を比較的短時日に訳出する気力をもちえたことに対して尚のこと、勉学の苦楽を共にした山川哲君に私は感謝しなければならない」 [小林 1945 : 4] と、金壽卿を単なる助力者以上の協働者として言及している。表3に整理した小林の翻訳脱稿時期からすれば、原典をともに読むところから訳稿を清書するところまでの2人の協力関係は、京城帝大法文学部時代にはじまり、東京帝大に進学した後も持続していたことが推察される。

こうした構造言語学の複数の潮流のなかで、金壽卿は特にプラハ学派に思想面でも方法面でも深入りしていたと見られる。まず思想面からいえば、

表3 小林英夫編訳『言語研究・現代の問題』（1945）の内容

著者	タイトル	原典		翻訳	
		言語	刊年	脱稿日	初出
バイイ C. Bally	共時態と通時態	仏	1937	1937/11/12	『方言』 8(1), 1938
シュツハルト H. Schuchardt	物と語	伊	1911	1938/10/14	『国語研究』 7(1), 1939
ブレンダル V. Brøndal	構造言語学	仏	1939	1940/4/17	『思想』 218, 1940
ロジツィウシュ J. v. Laziczius	いはゆる言語学上の 第三公理	独	1939	1940/6/13	『国語研究』 8(8), 1940
ヴァンドリエス J. Vandryes	静態言語学の課題に ついて	仏	1933	1940/11/4	『コトバ（再刊）』 3(1), 1941
ドラクロア H. Delacroix	言語の門口まで	仏	1933	1940/11/13	『国語研究』 9(2), 1941
ヴァンドリエス J. Vandryes	「経済に話す」	仏	1939	1940/11/22	『コトバ（再刊）』 3(7), 1941
レルヒ E. Lerch	言語における強制的 なものと同様なもの	独	1933	1940/12/3	—
テラチーニ B. A. Terracini	言語記号の形態論的 価値についての考察	伊	1939	1941/5/14	—
ベルトーニ G. Bertoni	「音韻法則」	伊	1923	1942/3/24	—
ヴァルトブルク W. v. Wartburg	史的言語学と記述言 語学との関係につ いての考察	独	1939	1942/3	—
ビューレル K. Bühler	言語理論の昨日今日	独	1934	1942/4/3	—
セシュエ A. Sechehayé	有機的進化と偶然的 進化	仏	1939	1942/4/7	—
バンヴェニスト É. Benveniste	言語記号の性質	仏	1939	1942/6/21	—
レルヒ E. Lerch	言語記号の本質につ いて	独	1939	1943/6/3	—
ボイセンス E. Buysens	言語記号の性質	仏	1941	1943/6/3	—

（出典）小林英夫編訳『言語研究・現代の問題』養徳社、1945より作成。

1942年2月、ソウルに一時的に帰っていた金壽卿は京城帝大の哲学談話会の例会で「言語の本質：マルティに従ひて」を発表した<sup>53</sup>。そこで報告した内容の記録はないものの、今や言語学のなかでほとんど語られることのないマルティ (Anton Marty, 1847-1914) の言語哲学に注目していること自体が興味深い。マルティは、師ブレンターノの記述心理学を言語研究へと応用し、言語の歴史的变化よりは心理や意思といった観点から現在の言語のあり方を探求したため、構造主義の先駆者と評価する者もいる [Kiesow 1990]。とりわけヤコブソン (R. Jakobson) やマテジウス (V. Mathesius)、トルンカ (B. Trnka) ら、プラハ学派の「理論と実践に紛れのない痕跡を残した」哲学者である [Leška 2002 : 84]。金壽卿は、現代言語学の思想的潮流を遡及してマルティに辿り着いたに違いない<sup>54</sup>。

方法論という側面でも、金壽卿は解放直後の1945～47年頃に脱稿した論文 [金壽卿 1947a, 1949a, b] において、プラハ学派が確立したとされる音韻論 (phonology) を既に使いこなしている。諸言語の物理的な発音を普遍的・客観的な基準で分析する音声学 (phonetics) に対し、音韻論は個別言語の使用者にとって知的意味をもった音の区別に注目する (たとえば日本語の「ん」は、音声学的には [n]・[m]・[ŋ] などの発音に区別され得るが、音韻論的観点からすればこれらは1つの音素 /N/ となる)。その際、その言語で区別される音の最小単位を音素 (phoneme) といい、音素どうしを区別する特徴のことを弁別的特徴 (distinctive feature) という。ある音素と他の音素を弁別するのは音の対立 (opposition)、たとえば有声音か無声音かといった対立である。こうして、

---

<sup>53</sup>「研究室通信」(京城帝國大學法文學部『學叢』第1輯、1943年、118頁)。哲学談話会は1933年から始まったもので、大学院生・助手・卒業者らが発表し、教授陣や在学生在が参加していたものようである。金壽卿が発表した時には、哲学科の宮本和吉、田邊重三のほか、小林英夫も参席していた。

<sup>54</sup> 当時も今もマルティの著書の日本語訳はない。ただ、当時唯一の概説的著作として小林 [1937] があつた。

その言語にとって意味のある音の対立を抽出していくのが音韻論の重要なプログラムであった<sup>55</sup>。金壽卿の解放直後の研究では、そうした知的トレーニングを経た形跡が多分に見られる。

このような一般言語学・構造言語学への志向性ととも、金壽卿は史的言語学にも深く入り込んだ。まず、小林英夫のもとでは、既に印欧諸語の史的言語学の古典となっていたメイエ (Antoine Meillet) の『史的言語学における比較の方法』[メイエ 1977] をフランス語で通読していた<sup>56</sup>。同書は、異なる言語間で安易な表面的要素の比較に陥ることなく、厳密に比較するための方法を説いた著書であり、金壽卿の朝鮮語史研究に一定の影響を与えたと思われる。メイエの弟子であるヴァンドリエス (Joseph Vendryes) の史的言語学も参照しており [金壽卿 1947 : 132]、合わせて印欧語学の厳密な方法論を習得していたと考えられる。

朝鮮語学に関連しては、もちろん小倉進平の研究に接し、その文献的な蓄積に学んだことは間違いない。ただ、学問的な影響関係は必ずしも師匠一弟子と直線で結ばれるようなものではない。京城帝大で小倉進平に朝鮮語学を学んだ<sup>イスンニョン</sup>李崇寧 [1983 : 449] も、その講義について「最後まで文献学の枠から抜け出せない感じ」で「新味がなく羅列と紹介に終始する感」があり、むしろ「才気あふれる」小林英夫から影響を受けたと回顧している。金壽卿もまた、朝鮮語史を小倉進平から学びつつも、その枠に収まらない研究関心を有していたと考えられる。

先述のとおり金壽卿はクーランの『朝鮮書誌』の翻訳を1939年から進めていた。しかも、それは単に横文字を縦にするだけの作業ではなく、金壽卿は訳稿に訳注を加えていた。解放後に出版する際には、「学学的」とみ

---

<sup>55</sup> 1920-30年代のプラハ学派の音韻論については、トゥルベツコイ [1980]、ヤコブソン [1996] などを参照。

<sup>56</sup> 小林 [1951 : 347] による。その他にもモノグラフィーを2人でたくさん読んだと記している。

なされるのを怖れて全て割愛してしまったが<sup>57</sup>、逆にいえば、自らの書誌的調査にもとづいた詳細な訳注を加えていたのであろう。

そのような朝鮮語史の資料にどっぷりと使っていたと考えられるのが、東京帝大の大学院時代と京城帝大嘱託時代である。特にソウルで1945年に印刷した『「老乞大」諸板の再吟味』[京城帝国大学法文学部 1945]は、この時期の金壽卿の研究の方向性をよく示すものである【図7】。本書は、前年に発行した影印本『老乞大諺解』[京城帝国大学法文学部 1944]（以下、「城大本」）の別冊附録と位置づけられた。『老乞大』は朝鮮で編まれた中国語会話読本であり、「諺解」とはそれにハングルで発音と翻訳を付記したものである。朝鮮王朝の宮廷図書館だった奎章閣（植民地期に京城帝大附属図書館へ移管）には、『老乞大』や『老乞大諺解』の種々のバージョンが所蔵されていた。その『老乞大諺解』のなかから、京城帝大の朝鮮史講座教授・末松保和が善本と判断したものを選び、解題をつけて影印出版したのが城大本であっ

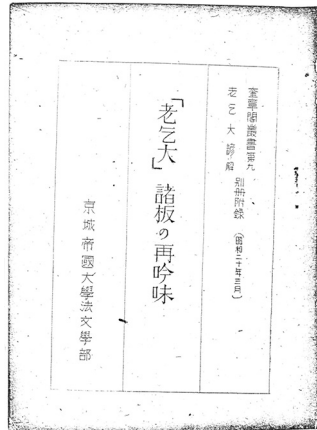


図7 『「老乞大」諸板の再吟味』（1945年3月）

<sup>57</sup> 金壽卿 [1946 : 191] による。クーランの著作年譜も活用したと記されている。

た。末松は解題のなかで漢字の誤植を一部指摘していたが、出版後、法制史講座教授・内藤吉之助が、誤植の全て訂正された別本が奎章閣にあると指摘した。つまり城大本の原典が校正未完本で、その訂正本が現存していたことが発覚したのである。そこで末松は城大本の原典と訂正本の比較対照と附属図書館所蔵の諸版の総合調査を、囑託の金壽卿に依頼した<sup>58</sup>。その報告書を出版したものが『再吟味』であった。

金壽卿 [1945] はまず奎章閣図書から33点の「老乞大」を見つけ出した。そこから先の書誌調査はいかようにでも煩瑣なものになり得るところだが、この報告書の興味深い点は、金壽卿がそれを「筆者の考案」による記号によって整理・分類したことである。すなわち彼は、本文で用いられる言語（甲／乙）、本文の内容（Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ）、同一内容本のうちの板本（a／b）、同一板本での印刷（1, 2,...）の4つの変数によって整理した。その作業の結果、6種の異本があることを明らかにし、図示した【図8】。諸版を比較対照して

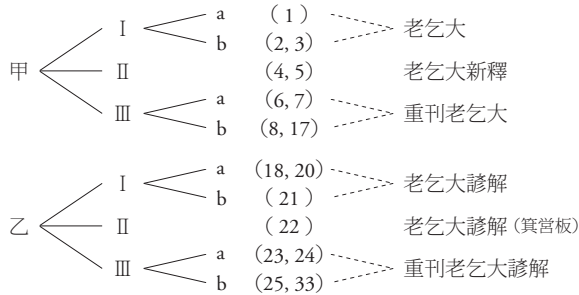


図8 老乞大の諸板

<sup>58</sup> 末松保和「小引」[京城帝国大学法文学部 1945]。『末松保和朝鮮史著作集』全6巻（吉川弘文館、1995-97年）には、1944年の影印本への解題は収録されているのに、この「小引」は入っておらず、その存在すら言及されていない。なお、『再吟味』を紹介した方鍾鉉 [1946: 40-41] は、内藤吉之助の役割を言及しておらず、金壽卿が末松の誤りをただしたかのように書いている。それも有り得る話なので、ここに付記しておきたい。

系統を明らかにする手法自体は書誌学の正攻法であろうが、4つのシンプルな弁別的特徴の組み合わせで、テキスト間の関係の構造を記号化する手つきは構造主義的ともいえる。その上で、城大本底本と訂正本の比較を、漢文部分のみならずハングル部分にもおこなった。実に基礎的な書誌の研究であり、解放直後に朝鮮語学者の方 <sup>パンジョンヒョン</sup>鍾 鉉 [1946] は、「誰かが一度はしなければならぬ重大なことを、氏〔金壽卿〕がみなのためにしてくれた」もので、「実にこの方面の専門家によい資料」だと絶賛している。ただ、謄写版で広く普及しなかったためか、金壽卿が越北したためか、理由は分からないが、『再吟味』は1990年代まで「見落としてはならない業績なのに、その内容が全く知られていないもの」〔安秉禧 1996 : 1〕になってしまった。

当時、朝鮮語史の資料は代表的なものであっても稀覯本に属し、一般の研究者にとっては接すること自体が容易なことではなかった<sup>59</sup>。そうした状況で、朝鮮語史の原資料に接していたことは、金壽卿言語学の形成にとって重要な蓄積となったであろう。

かくして、ソシユールの表現を借りれば、金壽卿は、言語を同時代の関係性のなかでとらえる共時的 (synchronic) な観点と、歴史的な変化のなかでとらえる通時的 (diachronic) な観点の両方を獲得しようとしていたといえよう。

### 3. 脱植民地化と分断のなかの朝鮮語学

日本の敗戦、朝鮮の解放は、金壽卿の言語学にとって何だったのか。本章では、まず米軍政下の南朝鮮での金壽卿の歩みを可能な限り明らかにし、越北の背景を描き出す。その上で、朝鮮戦争前—それはソ連でスターリン

---

<sup>59</sup> 李基文 [1982 : 2] (初出は1959年) は、「最近にいたっても〔朝鮮語史の〕代表的な文献でさえ利用することは特惠に属することだった」と述べている。

が言語学に関する論文を『プラウダ』誌に公刊する前でもあった一の時期に限定し、金壽卿の言語学を1945年以前の延長線上において位置づけていく。

### 3-1. 越北前の活動と研究：2つの総合大学計画の間で

1945年8月15日の解放の日を迎え、京城帝大の朝鮮人教職員や学生らの動きは素早かった。8月16日までに京城大学自治委員会を組織し、8月17日には大学の接收を進めた。自治委員会は、大学正門に掲げられた「京城帝国大学」の表札から「帝国」の2文字を黒々と塗り消し、研究室・図書館なども封印・警備した〔森田 1964 : 401-404〕。この自治委員会のなかに金壽卿がいた。彼の履歴書によれば、8月15日付で京城大学自治委員会法文学部委員となった<sup>60</sup>。

米軍が仁川に上陸したのが9月8日のことであるから、自治委員会は文字通り朝鮮人主導の組織であった。そこでは当時の朝鮮全体の動向も反映し、左派が圧倒的に優勢であった。ソウルの各専門学校・大学の自治組織は協議会組織まで結成していたが、9月11日から業務を開始した米軍政の学務当局は、こうした自治組織を無視して高等教育行政を進めた〔姜明淑 2002 : 28-35〕。こうした左派主導の大学の自治組織と米軍政との葛藤はその後も続いた。京城帝大第1期生だった兪鎮午〔1974a〕の回想によれば、10月初めに、金壽卿・李明善・朱在璜チュージェファンら自治委員会のメンバーがやってきて、大学再建の事業に当たるよう要請してきた。その後、教職員や学生・卒業生からなる大学総会が総長候補を選出したものの、最終的に、米軍政はその意向を聞き入れることはなかった〔兪鎮午 1974b, c〕。小林英夫〔1951 : 346〕が引き揚げ前に聞いたところでは、金壽卿は助教授として言語学講座を引き継ぐことに内定していたという。ただ、これも大学の自治組織の

---

<sup>60</sup> 前掲・金大履歴書。



中での内定だったと思われ、実現することはなかった。そもそも法文学部の建物は米陸軍航空隊第308爆撃隊が占拠しており、授業も翌年春になるまで開講しなかった [USAMGIK 1946 : 98-101, 108-109]。結局、金壽卿は1945年11月30日付で京城大の嘱託および自治委員会委員を辞職した<sup>61</sup>。

一方、解放直後から大学の外側で金壽卿が関わっていたのが震檀学会<sup>チンタン</sup>の再建であった。震檀学会は、朝鮮文化の研究を目的にソウルで1934年に発足した朝鮮人研究者による学会であり、1942年の朝鮮語学会弾圧事件を受けて活動を中断していた。1945年8月16日、ソウル仁寺洞の泰和亭<sup>インサドン テファジョン</sup>で震檀学会の会員が集まり、再発足のための集まりが開かれ、委員長に民俗学者の宋錫夏<sup>ソンソツカ</sup>を据えた。その場に参加していた金壽卿は、常任委員の1人として幹事を務めることになった<sup>62</sup>。この頃の震檀学会は左派も右派も集まる学会であり<sup>63</sup>、建国準備委員会にも関与していたし、米軍政下では軍政当局との関係も結んでいた。金壽卿が震檀学会でおこなった活動は、分かっている限りでは次のとおりである<sup>64</sup>。

- |            |   |
|------------|---|
| 1945年10月9日 | 訓民正音頒布記念講演会で李崇寧ともに参加。   |
| 11月        | 論文「龍飛御天歌」挿入子音考」を脱稿し入稿。  |
| 12月25日     | 第2回例会で「ソ連アカデミーのための新進学徒の養成」を報告。                                      |
| 1946年2月26日 | 朝鮮山岳会主催の済州島漢拏山 <sup>チェジュ ハルラ</sup> 学術調査隊に震檀学会メンバーとして派遣される (-3月17日)。 |

<sup>61</sup> 前掲・金大履歴書。なお、京城大学法文学部が授業を再開するのは、翌1946年春のことであった。

<sup>62</sup> 金載元 [1984 : 225] ; “彙報”, 『震檀學報』 15号, 1947, pp.151-153.

<sup>63</sup> 震檀学会のその後の分裂 (左右対立、親日派をめぐる対立) については、李崇寧 [1983 : 461-463 ; 1984 : 240-243]。

<sup>64</sup> 前掲「彙報」 pp.151-152。

このうち論文については後述するとして、濟州島の調査隊については、ある程度詳細が分かるので説明しておこう。朝鮮山岳会はただの同好会ではなく、解放後間もなく宋錫夏を会長に結成された国土調査のための組織だった〔鄭秉峻 2010 : 115-130〕。濟州島の漢拏山の調査について宋錫夏は、調査を後援した自由新聞社のインタビューに答えて、「濟州島調査は、倭賊の軍事機密基地となっただけあって、なかなかおこなうことのできない所だった。地理上からみて、濟州島は南方文化圏に入り、クロスする点からして、今回の調査団で濟州を選択した」と述べている。調査団は、言語学班として金壽卿が同行したほか、登山医学班・一般社会班・雪質調査班・気象班・録音班・映画班・写真班・採譜班など18名の隊員からなっていた。また米軍政の積極的支援も受けており、人類学・考古学等を専攻する3名の米国人も同伴していた。3週間の調査を終えてソウルに戻った調査団は、3月30日、<sup>ウエソソデー</sup>倭城台で報告講演会を開催した。金壽卿はそこで「言語を通じてみた濟州島文化」を報告した。その内容は不明だが、宋錫夏によれば、採集した方言や<sup>ムーダン</sup>巫堂の声の古い言葉のなかに「モンゴルの影響が未だに残っていること」が分かったという<sup>65</sup>。このように金壽卿は、録音班も随行させて、歴史的観点も有した実証的な方言調査を実施していたことが垣間見られる。

解放後、南朝鮮にいる間に金壽卿が発表した唯一といえる書籍が、既に述べたクーラン『朝鮮文化史序説』（1946年5月発行）である【図9】。この翻訳書について、1つだけここで補足しておこう。それは、「訳者後記」で金壽卿が「翻訳書刊行の直接的恩人」として言及している<sup>ソンジン ス</sup>宣鎮秀という人物についてである。宣鎮秀は金壽卿の妻・李南載の外叔父（母の弟）で、<sup>ギ</sup>京畿道の<sup>クワンジュ</sup>廣州の出身である。宣鎮秀は1936年に廣州共産党事件に連累した<sup>キョン</sup>

---

<sup>65</sup> 以上の記述については、『自由新聞』1946.2.26, 3.20, 3.30。



図9 『朝鮮文化史序説』出版記念（1946年）

（備考）写真には「朝鮮文化史序説出版記念」「1946.7.8. 於 올림픽（オリンピック）」と記されている。真ん中で黒い上着を着て立っているのが金壽卿である。

ことがある経歴を有するほか<sup>66</sup>、『人文評論』などの文芸雑誌に関わりながら、1939年には文芸誌『文章』に投稿した「失人記」が推薦小説として掲載され、選者の李泰俊から「相当面白く読んだ」と評価されたこともある人物でもあった<sup>67</sup>。宣鎮秀は解放後に金壽卿の翻訳本を発行した凡章閣の中心人物だったと考えられるが、1946年1月、不幸にも家族を残して交通事故により亡くなってしまった。金壽卿が「訳者後記」で「さる1月初旬、印刷の途中に他界したことは訳者最大の悲しみである」と述べているのはそのためである。

さて、越北にいたる経緯を説明するために、話を大学へと戻そう。京城大学を辞した金壽卿は、1945年12月1日付で京城經濟専門学校の教授となり、

<sup>66</sup>『毎日申報』1936年3月6日。ただし、宣鎮秀が起訴された形跡はない。

<sup>67</sup>『文章』1939年10月号，pp.111-127。

フランス語等を教えていた【図10】<sup>68</sup>。同校の前身は、植民地期における官立の京城高等商業学校であり、1944年に規模縮小して同名に変更されていた。同校は1946年夏に創立したソウル大学の商科大学に引き継がれることになるが、当時は左派の講師が多かった。農業経済の金漢周<sup>キムハンジュ</sup>、社会経済史の全錫淡<sup>チョンソクダム</sup>、京城帝大同期の歴史学者・朴時亨、「純哲」の先輩・朴致祐<sup>パクチウ</sup>など、後に越北する研究者が数多く在職していた。また、翌1946年春からは京城大学法文学部の講師を兼任したほか、京城大学予科や京城師範学校（ソウル大学校師範大学の前身）に附設されていた臨時中等教員養成所で朝鮮



図10 京城經濟専門学校（1946年）

（備考）1946年6月20日付の写真には「ソウル經濟専門学校第1回卒業記念」と書かれている。金壽卿の姿は見られないが、遺族所蔵の写真である。

<sup>68</sup> 前掲・金大履歴書。教科科目については、崔兪鳳斗 [2007] に収録された金敏洙の回想による。

語学概論を講じていた<sup>69</sup>。このように、金壽卿はこの後にソウル大学校へと引き継がれる諸学校で言語学の講義をおこなっていた。

ソウルで大学統合の方針が検討されていた頃、平壤<sup>ピョンヤン</sup>においても総合大学設置に向けての準備が急ピッチで進められていた。北朝鮮臨時人民委員会は、1946年5月、北朝鮮総合大学創立準備委員会を組織し、必要な教授数や教授の選定方法を策定させた<sup>70</sup>。7月8日には、9月1日から金日成大学を開校することを決定した<sup>71</sup>。ところが、日本の植民地期には朝鮮総督府が中高等教育を抑制していた結果、朝鮮の大学は京城帝大1校のみであり、専門学校もソウルに集中していた。そのためこの頃、「科学文化人らがソウルを中心に南半部に多く集中して」おり、朝鮮北部では「大学教授教員の経験をもった人材は十指で数えられる程度」であった〔金日成総合大学1956：21-22〕。そこで、必要な人材を朝鮮南部や海外留学生から求める必要が生じた。そうした背景で、南の左派系の学者を集めるために、経済学者の金洗鎭<sup>キムグワンジン</sup>をはじめとする研究者が南に派遣され、教員委嘱の工作活動に当たることになった<sup>72</sup>。

平壤に総合大学が創設されるという消息は、さほど間もなく南の左派系新聞でも伝えられた<sup>73</sup>。一方、ちょうど同じ頃（7月13日）、米軍政は、専門

---

<sup>69</sup> 前掲・金大履歴書および崔奘鳳 [2009：364]。京城師範学校では金敏洙ら、京城大学予科では姜吉云、南廣祐らが学んだという。

<sup>70</sup> “北朝鮮総合大学創立準備委員会組織에 관한件”，北朝鮮臨時人民委員会決定 第21號，1946年5月29日〔国史編纂委員会1987：660-661〕。なお、金日成総合大学の成立史については、金基奘 [1996] および신효숙 [2003] が参考になる。

<sup>71</sup> “北朝鮮総合大学創立에 관한件”，北朝鮮臨時人民委員会決定 第40號，1946年7月8日〔北朝鮮人民委員会司法局1947：226-227〕。

<sup>72</sup> この情報は、金日成総合大学の哲学教授で、後に脱北したという崔光石の手記〔崔光石1968：148〕による。

<sup>73</sup> “平壤에 綜合大學：9월 개교 목표로 사무에 착수”，『獨立新報』7月18日；“平壤에 綜合大學設置”，『朝鮮人民報』7月19日（いずれも李吉相・吳萬錫 [1997：93，654-655] に収録）。また、金基奘 [1996] を参照。

学校などを統廃合した9つの単科大学からなる国立ソウル大学校設立案(国大案)を発表した。これに対し学生や教職員等が反対運動を展開し、事態が収束するまで2年ほどかかることになる(いわゆる「国大案波動」)。金壽卿が国大案反対運動にどれほど関わったかは定かでないが、米軍政下での大学政策をめぐる葛藤が越北の一背景であったことは疑いない<sup>74</sup>。

金壽卿の越北の経緯に関しては複数の可能性が考えられるが、京城帝大同期生だった朴時亨が一役を果たしたことはまず間違いなからう。金壽卿がソウルで朝鮮共産党に正式入党したのは1946年5月6日のことだったが、その加入時の保証人の1人が朴時亨だった。朴時亨は金錫亨とともに既に1945年10月には黨員となっており、彼が金壽卿の入党を仲介したものと考えられる<sup>75</sup>。朴時亨は、1981年に公表した手記のなかで、1946年8月のある日、「思いがけず平壤から訪ねてきたある活動家<sup>イルクン</sup>から、金日成に招待されている旨を伝えられたと書いている[朴時亨 1981: 261]。また、小説『人生の絶頂』では、金壽卿を訪ねて来た朴時亨と金錫亨が大学委嘱の旨を伝え、少し遅れてやってきた申龜鉉が金日成名義の委嘱状を持って来たたと描写されている[리규진 1996: 31-32]。申龜鉉が、1946年2月までに既に越北して元山労働者政治学校の校長となっており、8月には金日成大学教員となっていた経緯を踏まえると<sup>76</sup>、申龜鉉もまた何らかの役割を果たしたとも考えられる。

そして金壽卿は、「8月17日の夜半、半ズボンに登山帽という形で密かに38度線を越えて入北」した<sup>77</sup>。28歳の夏のことであった。ソウルに残って

---

<sup>74</sup> 金基奭 [1996: 230-234] は、初期の金大教授の共通点として、(1) 各分野で卓越した業績を積んだ著名な学者であること、(2) 国内外の帝国大学を出た同門で、それぞれ独特な学縁で結ばれた人間関係を維持していたこと、(3) 1945年秋以降、革新政党に加入し、国大案反対運動で中心的な役割を担ったこと、という3点を挙げている。

<sup>75</sup> いずれも前掲・金大履歴書による。

<sup>76</sup> 前掲・金大履歴書。

<sup>77</sup> 金壽卿が平壤から1957年1月27日付で小林英夫に宛てて送った日本語書簡による(以下、

国大案波動のなかで共産党員として研究者を続けるか、共産主義革命が進行している平壤で新たな大学の創立に参加するか、その選択肢のなかで後者を選んだのである。同行したのは金錫亨と朴時亨であり、出立の直前になるまで妻にも知らせない、本当に「密か」な越境であった<sup>78</sup>。書物も何も携えることなく、着の身着のままでの越北であった。その後、南北朝鮮がこれほど長い間に渡って分断するとは想像もしていなかったことであろう。

### 3-2. 金日成綜合大学と朝鮮語文研究会

金壽卿は、1946年8月20日付で、金日成大学文学部の教員として任命された【図11】<sup>79</sup>。早速9月15日には開校式が開かれ、10月には開講したというのだから、相当慌ただしかったことであろう。当初は文学部には史学科・文学科・教育学科の3学科しかなく、朝鮮語学は文学科のなかに含まれていた〔金日成綜合大学 1956：18-19, 23-27〕。翌1947年1月付の金日成大学総長・キムドゥボン金料奉名義の書類によれば、それまでに任命された教員は139名（非常勤や助手等を除く）、うち文学部は31名であったが、言語学を担任していたのは金壽卿1人であった（「朝鮮語」は他に4名の講師がいた）<sup>80</sup>。同年7月には、専任教員を60名増員する案が内部で作成され、言語学分野では南からキムピョングネ金炳濟

---

「小林宛書簡」と略す)。この箇所は、小林英夫の随筆「白いハト」〔小林 1957：363〕にも引用されているが、「形」を「いでたち」と直すなど、小林が日本語としてより読みやすくするために、多少手を加えている。本稿は、小林英夫の遺族のご厚意により閲覧させていただいた書簡原文から直接引用することとする。なお、原文は朝鮮語式に分ち書きをし、句読点の代わりにカンマとピリオドを用いているが、それは現代日本語式に改めた上で引用する。

<sup>78</sup> 遺族による。なお、家族が平壤で合流したのはそれから約2ヶ月後のことであった。

<sup>79</sup> 前掲・金大履歴書。

<sup>80</sup> “教職員任命에 관한 件”，北朝鮮金日成大學總長金料奉→北朝鮮臨時人民委員會教育庁，1947年1月付，前掲『一九四七年度 金日成大學發令件』所収。同書類によれば、金壽卿の担当は英語と言語学だった。



1945	8	15	京城大学自治委員会漢文部委員
1945	10	30	京城大学漢部及自治委員会委員 兼任
1945	12	1	京城経済学門学教授 教授
1946	3	1	京城大学漢文部 講師 (兼任)
1946	5	19	京城経済学門学部 教授 京城大学漢文部 講師 兼任
1946	8	20	北朝鮮金日成大学漢文部 教授
1946	10	1	北朝鮮金日成大学附属図書館長 (兼任)

図11 金壽卿履歷書 (1945～46年部分抜粋)

(備考) 金日成大学に提出した1946年12月28日付履歷書による。脚注35を参照。

らを「招聘」する計画が立案された<sup>81</sup>。詳しくは不明ながら、模索の末、1949年の新年度までに10学部24講座、教員数153名、学生数2,746名の総合大学として編成された。文学部は歴史学部（朝鮮史学科、世界史学科、哲学科）、朝鮮語文学部（朝鮮語学科、朝鮮文学科、新聞学科）、外国語文学部（露文学科、英文学科）等に分割された。このうち金壽卿の所属する朝鮮語学科は学生数71名、所属教員数は5名まで拡張された〔金日成総合大学1956：42-43〕。

金壽卿は学部の運営のみならず、1946年10月1日付で図書館長にも任命されていた。大学10年史が明らかにしているように、「1冊の本も無い状態から出発し、図書館事業は何よりもまず図書を広範に蒐集する事業から始めなければならなかった」〔金日成総合大学1956：37〕。金壽卿は任用に当たった調査書で、「語学方面で最も優秀な素質があり、先進各国語に通じている。言語学で独歩的な存在」と評価されていたが<sup>82</sup>、外国語に通じ書誌学にも明かった点において、図書蒐集を第一の課題としていた図書館創

<sup>81</sup> “大學教員招聘依頼件”，北朝大366號，1947年7月19日，前掲『一九四七年度金日成大學發令件』所収。

<sup>82</sup> 前掲・金大履歷書。



立過程に欠かせぬ人材だったのだろう。言語学者にして革命家であった金料奉が朝鮮語文献を寄贈するなど、一般の寄贈書で3万4千冊余りを集め、ソ連軍司令部からも25,524冊の各種図書の寄贈を受けた。南北朝鮮から34,073冊を購入した。1949年には中国東北人民政府から時価約20万ウォン相当の図書を、レニングラードの科学アカデミー図書館からも多数の學術書の寄贈も受けた。そうした過程で1948年には9万8千冊余り、1950年には13万5千冊余り（漢籍が7万余、洋装本が6万余り）の蔵書となった〔金日成綜合大学 1956：37-38, 50-51〕。

この時期、金壽卿が力を注いでいたのは、1947年2月に組織された朝鮮語文研究会の活動であった。研究会の本部は金日成大学に置かれ、金壽卿の城大同期であり朝鮮語学会への参加経験も有していた申龜鉉が委員長を担った。名称は研究会であるが、これは北朝鮮臨時人民委員会の決定によって設置され、教育局長が指揮監督する公的な組織であった。同委員会の決定書は、研究会の設立趣旨に関して、朝鮮語が日本帝国主義者に発展を停止させられていたが、「今日の民主主義自主独立国家建設の途上において科学的理念に根拠した研究をかさね、朝鮮語文の統一と発展を期す」ことで、「朝鮮民族文化建設の基礎」をつくるとの目的を掲げていた。そして、文化建設の中心的な事業として、漢字、横書および綴字法（正書法）の原案を作成し（1947年末まで）、朝鮮語辞典を編纂すること（1949年末まで）を掲げていた。このように朝鮮語文研究会は、単なる学問研究にとどまらず、言語の国民的規範を時限付きで創制することが最初の任務として与えられることになった<sup>83</sup>。後述するように、この頃、金壽卿は綴字法に関する論文を発表しているが、それはこの研究会のミッションの一環だったと考えられる。

---

<sup>83</sup> “朝鮮語文研究에 관한 決定書”, 北朝鮮臨時人民委員會決定第175號, 1947年2月3日 [北朝鮮人民委員會司法局 1947：227-228]。朝鮮語文研究会 [1949] も参照。

1948年、南では8月に大韓民国が、北では9月に朝鮮民主主義人民共和国が建国を宣言した。それから間もない10月の内閣決定により、朝鮮語文研究会は教育省に移管され、新たに朝鮮語文法教科書と朝鮮語辞典を1949年末までに公刊することが任務として課された<sup>84</sup>。金壽卿は、文法編集文科委員会（委員長は<sup>チョンモン秀</sup>田蒙秀）の一委員となり、1949年に公刊された『朝鮮語文法』編纂の中心メンバーとして関与した<sup>85</sup>。

朝鮮語文研究会が雑誌『朝鮮語研究』を出していた1949～50年は、金壽卿の研学生活のなかでも多作な年だった。名前を明記したものだけでも論文が3本、ソ連の言語学概説書の翻訳が単行本1冊と論文6本、そしてこの『朝鮮語文法』が出版された（文献目録参照）。ここで詳細は述べないが、他にも朝鮮語文研究会名義ではあるが実質的に金壽卿が書いた文章もあると考えられる。

私生活面では、まず1946年10月に妻、母、2人の子、妹、従妹が平壤に合流した。金日成大学の官舎第4号に居を構え、1948年・49年には続けて2人の子ども（本書寄稿の金惠英、金泰成両氏）が生まれた。官舎の隣には金錫亨の家族が住んでいた。金壽卿の妻・李南載と金錫亨の妻・<sup>ユハギン</sup>高學仁は梨花女專の同期生でもあり、たいへん親密に暮らしていたという。

だが、1950年6月に金壽卿は私生活においても学問的にも衝撃的な転換

---

<sup>84</sup> “朝鮮語研究會에 관한 決定書”, 朝鮮民主主義人民共和国内閣決定第10號, 『조선민주주의 인민공화국 내각공보』 1948년 제1호, pp.2-3.

<sup>85</sup> 1949年の文法書も、相当部分を金壽卿が執筆していたようである。金壽卿は小林宛書簡で、「私は主として現代朝鮮語の文法体系樹立といった方面に専念し、1949年に400p. (菊版)ばかりの朝鮮語文法書を出し、1954年には中学校用の教科書を書いたことがあります」と書いている。また、遺族によれば、1948年に『조선어 문법 (대학용)』との著書を既に出していたとの情報がある。これに関連して、金日成総合大学10年史では、1946～50年の間の時期のこととして、「朝鮮語文学部朝鮮語学講座・金壽卿副教授は“朝鮮語文法研究”を完成したが、これは先進的言語学理論に基づき朝鮮語文法を体系化する新たな試みだった」と述べている [金日成総合大学 1956 : 57]。だとすれば朝鮮語文研究会が文法書を出す前に、大学講義用の文法書を金壽卿がまとめたことになる。

点を迎えることになる。1つは言うまでもなく朝鮮戦争の勃発である。金壽卿は死の峠を幾度も越えて生き延びたが、家族とは生き別れになってしまった。もう1つは、ちょうど朝鮮戦争直前に起きたソ連における言語学理論の大転換である。この転換以降の歩みについては、別稿 [板垣 2014] で論ずる。

### 3-3. 研究と朝鮮語の構築

1945年8月からの数年間は、しばしば「解放空間」と呼ばれる。日本の植民地支配から解放され、南北が分断されながらも、流動的な状況のなかで様々な可能性が模索されていた時期を表すのにふさわしい用語である。本節では解放空間における金壽卿の研究業績について検討するが、多作なこの時期について論点はさまざまなものであり得る。ここでは本稿2-2で提起した論点、すなわち (1) 一般言語学理論への志向性と (2) 史的言語学への志向性との関連において検討したい。越北後に国の言語政策にも関与し得る地位にあったことは、金壽卿言語学に大きな影響を及ぼした。すなわち、言語が「今こうである」または「かつてこうであった」ということを実証的に研究する記述的な言語学にとどまらず、「こうであるべき」という標準を策定しようとする言語学、すなわち (3) 規範文法への取り組みが金壽卿の研究の中心を占めるようになった。しかしながら、(3) 規範文法を創り出していくプロセスにおいても、(1) 一般言語学理論と (2) 史的言語学は重要な位置を占めていた。そうした観点から、以下 (1)・(2)・(3) の順で検討してみよう。その際、ここでは次の3本の論文に注目する。

- ①金壽卿 [1947b] 「朝鮮語学会『ハングル綴字法統一案』中で改正すべきいくつか 其一 漢字音表記における頭音 n 及び r について」
- ②金壽卿 [1949a] 「訓民正音成立史考」(脱稿は1947年中)
- ③金壽卿 [1949b] 「龍飛御天歌にみえる挿入字母の本質」

論文①は規範文法、論文②・③は史的言語学に関わる論文である。

まず、金壽卿は1957年に小林英夫に送った書簡のなかで、「とにかく言語学の一般理論的基礎の上に朝鮮語学を築き上げるといふことが私共の目標であります」と書いている。他言語や一般理論との関係のなかで朝鮮語学を構築することは、おそらく金壽卿言語学の一貫した信念ともいえるべきことだと思ふ。当時、「偉大なソ連軍」に解放されたと自己規定していた北朝鮮において、ソ連の学問体系は最も「先進的」なもののみなされていた。したがってここでいう一般理論の中心にソビエト言語学があったことは疑いない。そして1950年6月にスターリンの批判によって最終的に息の根を止められるまで、この頃のソビエト言語学の中核として独裁的地位にあったのがマル (N. Ya. Marr, 1865-1934) とマル派の言語学であった。

金壽卿は1949-50年の間にソ連の言語学を立て続けに翻訳紹介しているが、そのどれもがマル言語学に多かれ少なかれ基づく「新言語理論」に関わるものであった。グルジア出身でカフカス地方の諸言語の研究者だったマルは、1920-30年代に、メイエをはじめとする欧米の印欧諸語研究を中心とした「ブルジョワ言語学」を批判し、「ヤフェト理論」ともいわれる言語の統一理論を提起した。「唯物論的言語学」の体系を構築したと称する新言語理論 (ヤフェト理論) の特徴は、あらゆる言語が一元的に発生し同一の段階的変化によって発展するという、言語の一元的発展段階論にあった。その基礎には、経済 (生産様式) を土台 (下部構造) とし、言語を下部構造に規定される上部構造だと考える史的唯物論があった<sup>86</sup>。新言語理論が、ブルジョワ民族主義に対し国際主義的な理論であり、西欧中心の言語学に対し弱小民族の言語も含む一般言語学理論であると自己規定していたことは、植民地から独立したばかりの非-印欧語系の民族にとって、一定の魅

---

<sup>86</sup> マル理論については下記文献を参照した。ブイコフスキー [1946]、卒ヶ르만 [1949]、村山 [1950]、イヴィッチ [1974]、田中 [2000]。

力を有していたことは間違いない。

だが、この時期の金壽卿がソビエト言語学主流派のテーゼを100%受け入れていたとは言い難い。まず金壽卿がマルを直接引用している論文は、管見の限り、金料奉の功績を讃えるために書かれた講演原稿においてのみである〔金壽卿 1949c : 6〕。しかも、文字の表記における形態主義の思想（後述）を論ずる文脈で、「言語は単純に音ではなく同時に思惟である」という、マルでなくとも主張できるような部分を引用している程度である。史的唯物論の枠組は論文②で援用されているが、訓民正音創製の歴史背景として生産力の発展や封建的国家形態の整備があったこと、訓民正音が純粋に朝鮮語表記のためではなく漢字音の矯正のために創られた点では支配階級の階級的制約性を有していたという、いわば文字の社会性という穏当な範囲の適用にとどまっている。また、金壽卿が翻訳したレフォルマツキー（A. A. Reformatskii）の教科書『言語学』（原著は Реформатский [1947]、翻訳は레폴마트스끼 [1949]）は、序論では新言語理論が全く登場せず、語彙論・語音論・文法論・文字論と文法理論が並んだ後、最後の方の「世界の言語とその分類」で簡単にヤフェト理論が紹介される程度である。レフォルマツキーはモスクワ音韻論学派の創始者の1人で、マル学派とは一定の距離を置いていたといわれる<sup>87</sup>。金壽卿がそのようなソ連内の立場の差まで熟知していたかどうかは分からないが、総じて、金壽卿がマルの言語理論を無条件には受け入れていなかったとはいえよう。

構造言語学との関係でも、ソビエト言語学の見解に賛同していたかは疑問である。ソビエト言語学では、共時的言語学を重視するソシュールの言語理論や構造言語学を、言語発展の法則のない非歴史的・反社会的なブル

---

<sup>87</sup> レフォルマツキーはよく「私はマル派でも反マル派でもなく、非マル派だった」と語っていたという〔Алпатов 2004 : 138〕。レフォルマツキーについては Vinogradov [1988] も参考になる。

ジョワ言語学だとして批判していた。そのような見解を翻訳紹介していたのは、他ならぬ金壽卿自身であった [까즈넬선 1949, 체모다노프 1950]。しかし、ソシュールは共時的言語学と通時的言語学 (史的言語学) を峻別すべきことは説いたが、それは各時代の言語の体系から部分的な要素だけを取り出してその歴史的な持続や変化を論ずるような単純な方法を批判したのであって、歴史的な変化という視点を捨て去っていたわけではない。

ソシュールに通暁していた金壽卿が、ソビエト言語学による批判をどう解釈したかは分からないが、明らかなのは、上記の論文①～③のいずれにおいても、ソシュールの共時的言語学の基本概念を用いていることである。論文①・②では、言語は差異の体系であるというソシュールの基本テーゼを提示している。

①言語は1つの価値であり、それゆえ、あたかも貨幣価値が貨幣体系との関連下においてのみはじめて理解されるように、言語価値も言語体系のなかでのみ理解されるのである。([三], 1947年6月8日)

② [...] 音韻は示差的要素であるため (あたかも貨幣価値のように)、同一体系中の他の音韻との関係に依拠しないでは、これを定義することができない。すなわち、音韻は音韻体系から離れて存在することはできない。(p.151)

いずれも言語を貨幣と対置させて議論しており、マルクスの資本論とも接続できるようになっているが、実はこれも既にソシュールが音韻論に関連して言語価値を説明する際に提示していた比喻であった<sup>88</sup>。論文③は、全体が音韻論的な考え方に基づいた研究だが、論文の基本枠組を提示する箇

---

<sup>88</sup> ソシュール [1940 : 157] (II-4-3)。ソシュールの貨幣への言及については、丸山 [1981 : 209-225] を参照。

所で、「統合 (syntagme)」というソシュールの共時的言語学の重要概念を引用している。しかも、それをレフォルマツキーの前掲教科書や、マルの高弟であるメシチャニーノフ (I. I. Meshchaninov) の著書 (1945年)<sup>89</sup>における文法論とつなげながら、小倉進平や崔 鉉 培<sup>チエヒョンベ</sup>らの見解を退けている (pp.19-22)。してみれば、この頃の金壽卿は、教条主義的に構造言語学を排斥するのではなく、むしろ構造言語学とソビエト言語学の結合の可能性を模索していたのではないかと推察されるのである。

そのことを史的言語学に関して検討しておこう。金壽卿は、越北後は現代朝鮮語研究にほぼ専念することになり、朝鮮語史に関する専門的な論文は1940年代の論文②・③と1980-90年代の晩年の著作にほぼ限られている<sup>90</sup>。その背景はいくつか考えられる。第1に、既に述べたように、1940年代には奎章閣資料をも用いた1945年以前の研究の蓄積がまだあったことである。実際、論文③の原型となる論文は1945年11月に脱稿していた<sup>91</sup>。論文②でも、京城大学所蔵の訓民正音のテキストへの参照が見られる。第2に、朝鮮語史に関する史料はソウルにかなり集中していたため、北部で利用できるものが限られており、越北後は新規の実証的研究に困難があったと考えられることである。金壽卿は小林宛書簡 (1957年) で、「私共の主な困難は図書資料の欠乏です」としながら、越北時に図書を携行できなかったこと、集

---

<sup>89</sup> メシチャニーノフは単なるマルの追従者ではなく、文法論において数多くの業績を残している。ヴィノグラドフはメシチャニーノフの立場について、「マルの学説の「創造的發展」の名にかくれて、それに根本的な修正を加え、比較言語学ともつかず、マル学説ともつかない不明瞭な立場を築き上げた」と評価している [村山 1950 : 62]。

<sup>90</sup> 金壽卿 [1949a] では、ハングル創制以前に漢字を発音表記のために用いていた時代のことについて、「訓民正音創制의 前段階에 對하여」, 『民主朝鮮』1947年 10월 30-31일との論文を書いたと言及されているが、残念ながらこの論文は未見である。また、1950-60年代の数多くの著作のなかで朝鮮語史といえるものは、周時經の朝鮮語学について論じた金壽卿 [1954] 程度である。

<sup>91</sup> 金壽卿 [1947] は、「龍飛御天歌」が刊行されて500年となる年 (131頁)、すなわち1945年の秋に脱稿している。

めた書物も朝鮮戦争で焼けて「紙一枚戦前のものは残って」いないこと、停戦後はソ連・中国の文献は入手が容易だがそれ以外は難しいことなどを述べながら、小倉進平や前間恭作の旧著等を送ってほしいと依頼している。そして第3に、新たな民族文化建設という至上命題のもと、朝鮮語文の規範整備や朝鮮語辞典の編纂などの基礎事業が中心的な課題となっていたことである。

そうした状況で公表された論文②・③は、いずれも15世紀中葉の訓民正音創製期の言語と文字を扱っている。論文②は訓民正音の成立年代と底本を確定した上で、文字の成り立ちの原理、当時のモンゴル文字や中国音韻学に対する知識、文字創製の音韻論的な意義、そしてその社会的な意義と、同時代の横断面とでもいうべき状況を切り出している。一方、論文③は、1445年に成立したテキスト『龍飛御天歌』において語と語の間に挿入されているハングル（挿入字母）の機能を、音韻体系の分析によって明らかにしたものである。合わせて、15世紀中葉における朝鮮語の言語体系を言語外の社会的背景を含めて論ずる共時的言語学とでもいい得るものを構築しようとしていたように見える。

だからといって、金壽卿は、そうした15世紀の言語体系についての研究を、現代と切り離すことはなかった。いやむしろ、20世紀中葉の現代における言語政策と積極的に関連づけて朝鮮語史を論じていた。論文②では、訓民正音に潜在する体系性・科学性・大衆性にもかかわらず広く普及しなかった背景として、当時の階級性と時代性という制約を指摘している。その後、日帝の弾圧などを経ても保存されてきたのは、圧迫された人民の力のおかげだとした上で、「大衆性と科学性をもった訓民正音を人民の文字として最も力強く発展させることができる」のは「北朝鮮のような人民の力でなされる文化建設の国」であるとの信念を提起している（pp.155-156）。ちょうどハングルの広く普及させる「文盲退治」運動が展開されている最中に書かれた論文であり、朝鮮語史が言語外の社会的条件を媒介して現代



へと接続されている。

論文③は、副題からして「特に問題の現実性に照らして」と付いており、この頃ちょうど創られていた「朝鮮語新綴字法」の「理論的根拠探求」の一環として位置づけられている。論文中で紹介されているように、1948年1月に朝鮮語文研究会が公表した朝鮮語新綴字法案では、語と語をつなげる際に‘ハ’（シオッ）の字を挿入する間音（사이시옷）を廃し、代わって中間にアポストロフィを挿入することにしてきた（例：“<sup>テイツガン</sup>똥간”（便所）→“똥'간”）。この論文では、訓民正音を創製した時代に遡り、当時の音韻の対応関係を共時的に分析した上で、当初多様に表記されていた挿入字母が文法的な機能をもった助詞ではなく、2つの語を合成する際の「語音論的な事実」（同化作用の防止）を示すものだと結論づけた。そして、その後時代を下るにつれて単純化していった変化の「必然性」を明らかにし、その延長上に現代の新綴字法を位置づけた。新綴字法で符合’は「絶音符」と呼ばれたが、本論文の趣旨と一致する用語である。この符号は1950年代半ばから1960年代半ばまで実際に用いられることになるが、その導入に際して、金壽卿言語学が積極的に寄与したことは疑いない<sup>92</sup>。

党の機関誌（労働新聞）に掲載された言語政策の論説ともいえる論文①でも、言語学理論はもちろん、比較言語学や史的言語学の蓄積が活かされている。ここでの論点は、同じ漢字は同じ形態で一貫して表記するか（形態主義）、発音に合わせて変化させるか（表音主義）というものである。朝鮮語には、単語の初めに子音の r (ㄹ) が来たとき、その子音が欠落したり n (ㄴ) に変化したりする頭音の法則がある。その結果、例えば「勞」（ro）という漢字は、単語の途中に来ると「過勞」（kwa-ro）となるが、初めに来ると「労働」（no-dong）と発音する（北朝鮮でも当時はそう発音していたという）。発音に合わせて no-dong (노동) と記すか（表音主義）、表記の一貫性を重視

---

<sup>92</sup> 安秉禧 [2001 : 113] を参照。なお、1954年以降は“사이표”とよばれた。

して ro-dong (로동) と記すか (形態主義) という問いに際し、当時漢字使用の撤廃を検討していた北朝鮮では、同一漢字を常に同一ハングルで表記する後者を選択した。その理論的根拠を提示したのが論文①である。それもイデオロギー批判というよりは、理論的および歴史的な観点で書かれている。詳細は省略するが、朝鮮時代の知識人による表音文字としてのハングルへの過剰評価を批判したり、フランス語の“oi”表記の発音の歴史的变化を例に挙げたり、音韻論を説明するにあたってロシア語と朝鮮語の音韻体系の違いを論じたり、400年以上続く訓民正音の学習法において頭音の r を発音してきたことを指摘したりなど、比較言語学・史的言語学の知識が活用されている。

北朝鮮では、短期間中に朝鮮語の縦書きを横書きにし、漢字を撤廃し、さらには新たな文字まで創り出そうという、朝鮮語の革命とでもいうべき事業が進行していた。その事業に深く参画していた金壽卿は、言語学の知識が学問の内部にとどまらず、実際の政策へと反映されていく現場に居合わせていた。一般的には社会主義において「科学的」たることへの強い志向性があったことがその背景にあるが、それに加えて朝鮮語学に関していえば、言語学者だった金料奉が政治のトップの座にあったことの影響は大きかった。金壽卿は形態主義表記法の思想について、朝鮮語学者・周時經チュンギョンに淵源し、その弟子たる金料奉が継承・発展させたものと、その系譜を辿っている [金壽卿1949c: 6-7]。さらにいえば、金壽卿がそれを理論的に肉付けし、実際の表記として具現化したといっても過言ではなからう<sup>93</sup>。この学問と政治の蜜月が、その後の金壽卿の運命を左右することになるとは、この時考えてもみななかっただろう。

---

<sup>93</sup> この形態主義をより徹底させたのが新たに6つの字母を追加した朝鮮新綴字法であり、その制定に金壽卿は中核的役割を果たしたと考えられるが、これについては別稿 [板垣2014] で論ずる。

## おわりに

当初本稿では、小倉進平・河野六郎らの朝鮮語学との関係において、金壽卿の研究を位置づけてみようと考えていた。だが資料に分け入って調べているうちに、日本の朝鮮語学から影響を受けたとかそれを乗り越えたとか、そのような枠組では金壽卿の言語学をとらえきれないことが間もなく分かった。小林英夫の手ほどきも受けながらヨーロッパの言語学を濃密に学んだ金壽卿は、その類い希な語学能力を活かして、書物を通じて、世界各国の言語と言語学を直接学び取った。金壽卿は、そうした欧米の言語研究とも対話可能な一般言語学理論と哲学の上に朝鮮語学を構築しようとの志を早くから抱いていたと思われる。東京帝大の大学院に進んで、小倉進平の指導で本格的に朝鮮語学を学んでいた時も、一般理論、とりわけ構造言語学への関心は持続していた。一方、京城帝大に移管された奎章閣図書をはじめ朝鮮語史の資料にもかなり接しており、それが金壽卿にとっての文献学的な蓄積となっていた。

解放後に、そうした金壽卿言語学は一挙に開花することになる。越北後は朝鮮語史の資料の不足もあって、新たな朝鮮語史の調査研究は困難となるものの、代わって現代朝鮮語の規範を作り出していくための規範文法へのコミットが強くなった。一般理論の枠組はソビエト言語学へとシフトしていくが、マル言語学の枠組を積極的に翻訳紹介しながらも、その中心となるヤフェト理論に依拠することはなかった。むしろ構造言語学的な考え方とソビエト言語学との結合の模索も見られた。このように言語学理論、史的言語学、規範文法が練り合わさった金壽卿の朝鮮語学が見えてくる。

そうしたスケールをもった金壽卿の研究において、少なくとも本稿で扱った時期には日本人研究者への直接の言及がほとんど見られない。解放前の『老乞大諺解』の板本研究では史料的に末松保和の誤りを訂正したのみならず、結果的には小倉進平の著『朝鮮語学史』（初版1920年、増訂版1940年）

の不足を補うものとなっているが<sup>94</sup>、本人はそうとは明記していない。越北後の論文でも、挿入字母の解釈について小倉進平の見解を他の研究と合わせて批判しているほか（既述）、訓民正音成立時期をめぐる<sup>ホンギムン</sup>洪起文とともに河野六郎の論文を参照しているものの（論文② p.138）、継承とか克服とかいうことを論じられるほどのことはない。

むしろ日本との関係でいえば、何といたっても本稿で描いたような植民地化と戦争、そして解放という大状況とその経験が金壽卿に大きな影響を及ぼしたというべきであろう。1946年にソウルで出版したクーランの翻訳のあとがきでは、「朝鮮の解放のために闘ってきた革命闘士」に感謝の念を表している。越北後に書いた論文①（連載第1回）では、朝鮮語学会の綴字法（1933年）において「いくつか不十分な点を発見し、これに対しわれわれの独自の見解をもっていたが、日帝の野蛮的文化政策下において陣営内部の統一に無用な混乱をおよぼすことをおそれ沈黙を守ってきた」と述べている。論文②でもハングルが十分に普及しなかった要因に「日帝の弾圧」をあげている。朝鮮語学者としての金料奉を讃えた文章〔金壽卿 1949c：2〕でも、冒頭から解放前に「祖国の独立と民族解放のために不撓不屈の闘志で闘われた」ことに対し、まずは賛辞を送っている。朝鮮語研究者や京城帝大の同期生らが次々に逮捕され、名前を変えさせられ、学徒出陣の圧力がかかり、「国語常用」のスローガンのもと朝鮮語の領域がどんどん縮小されていくなか、辛うじて朝鮮語研究を継続していた金壽卿にとって、日本帝国主義は文字通り「野蛮」な存在であり、また民族解放のために闘った人たちには本当に感謝の念を抱いていたことであろう。そのような経験と認識は、その後の金壽卿の言語観や民族観にも影響を及ぼすことになる。

---

<sup>94</sup> 河野六郎による補注において、その旨が指摘されている〔小倉 1964：補注172〕。河野は金壽卿論文を目にしていたはずだが、戦後に入手できなかったためか、補注では当該文献に言及していない。

それが「金壽卿の朝鮮語研究にとって日本とは何か」という問いに対する、さしあたりの解答となるであろう。

謝辞：本論文の資料収集の過程で、金壽卿および小林英夫のご遺族のほか、多くの方々のお世話になった。以下、お名前を記させていただく（五十音順、敬称略）。李相祿、岡本真希子、菅野裕臣、金昌祿、熊谷明泰、コヨンジン、通堂あゆみ、朴漢龍、橋本繁、福井玲、洪宗郁、水野直樹、渡辺直紀。

## 参考文献

### 【金壽卿文献】

- 金壽卿 [1937] 「英語研究会」, 『學友會報 昭和十一年度』, 京城帝國大學豫科學友會文藝部。
- [1945] 「「老乞大」諸板の再吟味：訂本「老乞大諺解」の發見を機として」, 『「老乞大」諸板の再吟味』京城帝國大學法文學部, 奎章閣叢書 第九 老乞大諺解 別冊附録。
- [1946] “譯者後記”, 쿠-랑 [1946].
- [1947a] “「龍飛御天歌」挿入子音考”, 『震檀學報』 15
- [1947b] “朝鮮語學會『한글 맞춤법 통일안』中에서 改正할 몇가지 其一 漢字音表記에 있어서 頭音ㄴ及ㄹ에 對하여”, 『勞働新聞』 1947.6.6, 6.7, 6.8.
- [1949a] “訓民正音成立史考”, 金日成綜合大學歷史文學部『歴史・文學研究論文集』, 金日成綜合大學科學學術研究論叢・第一, 金日成綜合大學編輯部。
- [1949b] “龍飛御天歌에 보이는 挿入 字母의 本質：特히 問題의 現實性에 비추어”, 『조선어연구』 1-2.
- [1949c] “조선어 학자로서의 김두봉 선생”, 『조선어연구』 1-3.
- [1954] “주시경선생의 생애와 학설：선생의 서거 40주년에 제하여”, 『조선민주주의인민공화국 과학원 학보』 1954. No.5.

### 【코리아語文献】

- 姜明淑 [2002] 『美軍政期 高等教育 研究』, 서울대학교 교육학과 박사학위논문。
- 国史編纂委員會 [1987] 『北韓關係 資料集 V』, 国史編纂委員會。
- 金基奭 [1996] “김일성종합대학의 창설에 관한 일 연구”, 『教育理論』 10-1.
- 金炳華 [1979] 『韓國司法史 (近世編)』 (訂正初版), 一潮閣。
- 김일성종합대학 (金日成綜合大學) [1956] 『김일성종합대학 10년사』, 김일성종합대학。
- 金日洙 [2005] “역사가 金錫亨의 역사학”, 『역사와 경제』 54.

- 金載元 [1984] “光復에서 오늘까지”, 『震檀學報』 57.
- 카즈넬손, 에스·데 (С. Д. Кацнельсон) [1949] “쏘베트 一般言語學三十年” (김수경 역), 『조선어연구』 창간호.
- 레포마트스끼, 아.아. (А. А. Реформатский) [1949] 『(대학용) 언어학』 (김수경 역), 교육성.
- 리규춘 [1996] 『장편실화 삶의 메부리』, 금성청년출판사.
- [2001] 『장편실화 신념과 인간』, 금성청년종합출판사.
- 朴時亨 [1981] “조국력사연구의 보람찬 길에 세워주시어”, 『은혜로운 사랑속에서(1)』, 三學社.
- 方鍾鉉 [1946] “老乞大諺解”, 『한글』 11-2.
- 北朝鮮人民委員會司法局 [1947] 『北朝鮮法令集』, 北朝鮮人民委員會司法局.
- 宣鎭秀 [1939] “失人記”, 『文章』 1939年10月号.
- 신효숙 [2003] 『소련군정기 북한의 교육』, 교육과학사.
- 安秉禧 [1996] “老乞大와그 諺解書의 異本”, 『人文論叢』 35.
- [2001] “北韓의 맞춤법과 金料奉의 학설”, 『정신문화연구』 2001년 봄호.
- 俞鎭午 [1974a] “片片夜話 (63) 京城大學 總長”, 『東亞日報』 1974.5.14.
- [1974b] “片片夜話 (64)”, 『東亞日報』 1974.5.15.
- [1974c] “片片夜話 (65)”, 『東亞日報』 1974.5.16.
- 李基文 [1982] 『16세기 국어의 연구』, 탑출판사.
- 李吉相, 吳萬錫編 [1997] 『韓國教育資料集成 美軍政期篇 I』, 韓國精神文化研究院.
- 李崇寧 [1983] “나의 研究生活”, 『나의 걸어온 길 : 學術院 元老會員 回顧錄』, 대한민국 학술원.
- [1984] “震檀學會와 나”, 『震檀學報』 57.
- 板垣竜太 (이타가키 류타) [2014] “월북학자 김수경 언어학의 국제성과 민족성”, 신주백 엮음, 『한국 근현대 인문학의 제도화 : 1910~1959』, 혜안.
- 李忠雨 [1980] 『京城帝國大學』, 多樂園.
- 李熙昇 [2001] 『다시 태어나도 이 길을』, 도서출판 선영사.
- 朝鮮語文研究会 [1949] “조선 어문 연구회의 사업전망”, 『조선어연구』 1-1.
- 鄭根植 [2012] “‘탈냉전·분단’ 시대의 가족사쓰기 : 이산복합가족의 경험을 중심으로”, <호남지역사와 문화연구> 심포지움 발제문, 2012년 8월 23일, 보성문화원.
- 鄭秉峻 [2010] 『독도 1947 : 전후 독도문제와 한·미·일 관계』, 돌베개.
- 震檀學會 [1947] “彙報”, 『震檀學報』 15.
- 주께르만, И. И. (И. И. Цукерман) [1949] “Н. Я. 마르와 쏘베트 언어학” (김수경 역), 『조선어연구』 1-6.
- 체모다노프, Н. С. (Н. С. Чемоданов) [1950] “구조주의와 쏘베트 언어학” (김수경 역), 『조

선어연구』2-1.

崔炅鳳 [2009] “金壽卿의 국어학 연구와 그 의의”, 『한국어학』 45, 2009.

崔炅鳳 외 [2007] “해방 이후 국어 정립을 위한 학술적·정책적 활동 양상: 김민수 구술”,  
2007년도 구술자로 수집사업 녹취록, 국사편찬위원회.

崔光石 [1968] “北傀 金日成大學”, 『新東亞』 1968-6.

쿠-랑, 모리스 (Maurice Courant) [1946] 『朝鮮文化史序說』, 金壽卿訳, 凡章閣.

#### 【日本語文献】

安倍能成 [1966] 『我が生ひ立ち』, 岩波書店.

イヴィッチ, ミルカ (Milka Ivic) [1974] 『言語学の流れ』, 早田輝洋・井上史雄訳, みす  
ず書房.

小倉進平 [1964] 『(増訂補注) 朝鮮語学史』, 河野六郎補注, 刀江書院.

姜徳相 [1997] 『朝鮮人学徒出陣: もう一つのわだつみのこえ』, 岩波書店.

菅野裕臣 [一] 「菅野裕臣の Autobiografia」, [http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/cgi-bin/hr.cgi?  
autobio/autobio-2.html](http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/cgi-bin/hr.cgi?autobio/autobio-2.html)

熊谷明泰 [2000] 「南北朝鮮における言語規範乖離の起点: 頭音法則廃棄政策における  
金寿卿論文の位置」, 『関西大学人権問題研究室紀要』 41.

京城帝国大学同窓会 [1974] 『京城帝国大学創立五十周年記念誌 紺碧遙かに』, 京城帝  
国大学同窓会.

京城帝国大学法文学部 [1943] 「研究室通信」, 京城帝国大学法文学部『學叢』 1.

————— [1944] 『老乞大諺解』, 奎章閣叢書第九, 京城帝国大学法文学部.

————— [1945] 『「老乞大」諸板の再吟味』, 奎章閣叢書第九老乞大諺解  
別冊附録, 京城帝国大学法文学部.

小林智質平 [1937] 『マルティの言語學』 興文社.

小林英夫 [1940] 「譯者の序」, ソシュール [1940].

————— [1945] 『言語研究・現代の問題』, 有徳社.

————— [1951 (1977)] 「教え子」, 『小林英夫著作集 第10巻 随想』, みすず書房, 1977  
所収 (原著は『Papyrus (東京工業大学学友会図書館委員会)』 No.1, 1951)

————— [1957 (1977)] 「白いハト」, 『小林英夫著作集 第10巻 随想』, みすず書房,  
1977所収 (原著は『PHP』 第110号, 1957)

————— [1977] 「小林英夫著作目録」, 『小林英夫著作集 10』, みすず書房.

————— [1978] 「Os Lusíadas との触れ合い: あとがきに代えて」, ルイス・デ・カモン  
イス『ウズ・ルジアダス』, 岩波書店.

ソシュール, フェルヂナン・ド (Ferdinand de Saussure) [1940] 『言語學原論 (改譯新版)』,  
小林英夫訳, 岩波書店.

- 田中克彦 [2000] 『「スターリン言語学」精読』, 岩波書店.
- 朝鮮商工会議所 [1939] 『全鮮商工團體現勢調査』 朝鮮商工会議所.
- 東京大学 [1986] 『東京大学百年史 部局史一』 東京大学.
- 東京大学史料室編 [1998] 『東京大学の学徒動員・学徒出陣』 東京大学出版会.
- トゥルベツコイ, N. S. (N. S. Trubetzkoy) [1980] 『音韻論の原理』, 長嶋善郎訳, 岩波書店.
- ブイコフスキー (С. Н. Быковский) [1946] 『ソヴェート言語学』, 高木弘編訳, 象徴社.
- 釜山日報群山支社 [1928] 『開港三十周年記念 群山』 釜山日報群山支社.
- 丸山圭三郎 [1981] 『ソシユールの思想』, 岩波書店.
- 宮本和吉 [1951] 「京城大学」, 『文藝春秋』 1951年1月号.
- 村山七郎 [1950] 「ソヴィエト言語学とスターリンの批判」, 『思想』 317 (1950.11).
- メイエ, アントワヌ (Antoine Meillet) [1977] 『史的言語学における比較の方法』, 泉井久之助訳, みすず書房.
- 森田芳夫 [1964] 『朝鮮終戦の記録』, 巖南堂書店.
- ヤコブソン (Roman Jakobson) [1996] 『構造的音韻論』, 矢野通生ほか訳, 岩波書店.

#### 【英語文献】

- Kiesow, Karl-Friedrich [1990] "Marty on form and content in language", Mulligan ed., *Mind, Meaning and Metaphysics: The Philosophy and Theory of Language of Anton Marty*, Kluwer.
- Murra, John V. et al. eds. and trans. [1951] *The Soviet Linguistic Controversy*, King's Crown Press.
- Leška, Oldřich [2002] "Anton Marty's philosophy of language", Eva Hajičová et al. eds, *Prague Linguistic Circle papers*, Vol.4.
- United States Army Military Government in Korea (USAMGIK) [1946] "History of Bureau of Education from 11 September 1945 to 28 February 1946", 鄭泰秀編著『美軍政期 韓国教育史資料集 (上) (1945-1948)』, 弘文苑, 1992.
- Vinogradov, Victor ed. [1988] *Aleksandr Rerormatskij: Selected Writings*, Moscow: Progeress Publishers.

#### 【ロシア語文献】

- Алпатов, В. М. [2004] 《История одного мифа: Марр и марризм》, 2-е, УРСС.
- Реформатский, А. А. [1947] 《Введение в языкознание》, Гос. учебно-педагогическое изд-во Министерства просвещения РСФСР.
- Чиркин, С. В. [2006] 《Двадцать лет службы на Востоке: Записки царского дипломата》, Русский путь.



【文書類】

国家記録院（韓国）

『辯護士認可ニ關スル書類』, 朝鮮總督府法務局庶務係, 1936年, 国家記録院文書・管理番号 CJA0004097.

米国国立文書館（NARA）

『金大教員履歷書 文学部』, NARA 文書 RG#242, 2005 1/31.

『一九四七年度 金日成大學發令件』, 北朝鮮人委教育局, NARA 文書 RG #242, 2006 12/32.1.

【定期刊行物】

『毎日申報』, 『東亞日報』, 『自由新聞』, 『조선민주주의인민공화국 내각공보』, 『朝鮮總督府官報』, 『朝鮮總督府及所屬官署職員録』, 『朝鮮銀行會社組合要録』, 『中外日報』, 『全羅北道要覽』, 『京城帝國大学一覽』, 『東京帝國大學一覽』